# パネルディスカッション

## 『人口減少社会において地域を共に守り創る』

**コーディネーター**

ひょうご震災記念 21 世紀研究機構
副理事長　室﨑　益輝 氏

**パネリスト**

宮城県知事　村井　嘉浩 氏

常葉大学教授　重川希志依 氏

日野ボランティア・ネットワーク　山下　弘彦 氏

智頭町社会福祉協議会主任　吉田　圭吾 氏

鳥取県知事　平井　伸治

**○司会**

「人口減少社会において地域を共に守り創る」をテーマに、パネルディスカッションを行います。それでは、コーディネーター、パネリストの皆様に御登場いただきましょう。どうぞ皆様、大きな拍手でお迎えくださいませ。どうぞ御登壇くださいませ。（拍手）

それでは、コーディネーター、パネリストの皆さんを御紹介させていただきます。皆様の向かって左から、コーディネーターのひょうご震災記念21世紀研究機構副理事長の室﨑益輝様です。

続いて、パネリストの宮城県知事、村井嘉浩様です。

常葉大学教授、重川希志依様でございます。

日野ボランティア・ネットワーク、山下弘彦様でございます。

智頭町社会福祉協議会主任、吉田圭吾様です。

そして、平井伸治鳥取県知事でございます。

それでは、ここからの進行はコーディネーターの室﨑様にお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

**○室﨑氏**

皆さん方、これから引き続きよろしくお願いをいたします。このパネルディスカッションでは、まさに人口減少社会における地域コミュニティのあるべき姿ということを議論していただこうと思っております。先ほどの講演で、最初に私が申し上げましたように、私は答えを出し切れていないので、このパネルディスカッションで、優れた経験をお持ちの皆さん方からどんどん御意見を言っていただいて、みんなで答えを見出そうというのがここでの目的ですので、よろしくお願いします。

進め方は、時間が限られているので、3つのテーマをぐるぐる回すということにします。1回目は、自己紹介を兼ねて総論的なこと、このテーマについてまず何を思っている、感じているかというようなことを総論的に話をしていただく。それから、2つ目が、そういう中でどういう課題と、どういう対策を考えていかなければならないかという、解決の仕方や方向性についてのお話。最後に、なおその上でこれが最も重要だという、特にこれだけはしっかりやらないといけないということについて、御意見を伺うという形にさせていただきたいと思います。私の方から「時間厳守」と言うかもしれませんが、それはお許しを願いたいと思います。できるだけ時間を有効に使いたいと思います。よろしくお願いいたします。

早速です。1番目のテーマから入らせていただきたいと思います。まず、自己紹介をそれぞれしていただいて、それから、このテーマに関して日ごろ感じておられること、あるいはコミュニティの課題といった総論的なお話を伺いたいと思っております。まず、並んでいる順番でお願いいたします。今日は、遠くはるばる宮城県から村井知事さんにお越しいただきました。皆さん初めて顔を見られる方もおられると思いますけれども、今日はとてもラッキーだったと思います。ということで、村井さんは、自己紹介する必要はないのかもしれませんけど、よろしくお願いいたします。

**○村井氏**

皆さん、こんにちは。御紹介を賜りました宮城県知事の村井でございます。はるばるやってまいりました。今日は日帰りでございまして、今日、これが終わってからまた仙台に戻らなければいけません。せっかく来ましたので、私の話だけは、少なくとも頭に記憶に残していただきたいというふうに思います。冗談です。

まずもって、鳥取県の西部地震から 15 年ということで、改めまして 15 年前に被害に遭われた皆様に、心からお見舞いを申し上げたいと思います。ここまで復旧復興なさったのは、もう本当に皆様の力だと思って、心から敬意を表する次第でございます。また、東日本大震災以降、鳥取県の皆様には県民を挙げて御支援をいただいております。平井知事さんとは本当に仲がいいということもございまして、鳥取県から今でも 8 名の職員の人に宮城県に応援に来ていただいております。鳥取県は平井さんになりましてから行革を随分進められておりまして、職員の数も職員定数もぎりぎりまで減らしている中で、苦しい中で 8 名派遣をしていただいておりますし、若桜町から 1 名、そして智頭町からも 1 名、そして三朝町からも 1 名、南三陸町に職員を派遣していただいております。この場をお借りいたしまして、感謝を申し上げたいと思います。

私のプロフィールですけれども、私は、実は大阪生まれの大阪育ちでございます。大学は防衛大学に行って自衛官になりまして、ヘリコプターのパイロットになって、そのとき初めて働いたのが宮城県。そしてその後、政治家を目指して自衛隊をやめて、県会議員になって 10 年勤め、そしてその後に知事になって 10 年ということでございます。知事 2 期目のときに東日本大震災に遭いました。こちらの方の地震も大変大きな被害でありましたけれども、東日本大震災は未曽有の震災でございまして、1 万人以上の方が亡くなったわけでございます。一番多いときには 1 日に 1,083 体の御遺体が見つかりました。道路が寸断されて、瓦れきに埋め尽くされて、そして何もかも失って、全く避難所にどこに誰が避難しているかも分からないような状況で、食べるものがなくて、燃料がなくて、本当にパニックのような状況でございましたけれども、何とか 4 年半、ここまで立て直すことができたわけでございます。

今日は地域コミュニティということでございますので、少しだけお話をさせていただきます。実は、昨年の 11 月に宮城県は、東日本大震災の前後で防災訓練、防災組織をどう組織をしていて、それが東日本大震災でどう役に立ちましたかというようなアンケートをとりました。東日本大震災の前にしっかりとした防災組織をつくっていたといったのが大体 7 割以上の回答でございましたので、ほぼ皆さん組織づくりはできていたと。恐らく鳥取県も同じ状況だと思います。じゃあ、何をやっていたんですかと、震災前にどういう訓練をしていましたかといったら、やはり一番多いのは消火訓練、火事が起こったときの消火訓練が 8 割。それから、避難訓練が 6 割。それから、ただ安否確認訓練というのは 5 割ぐらいしかしていなかったんですね。頭に入れておいてください。震災前に大体ほぼ 7 割が組織化していて、その組織はほとんど消火訓練をやっていたと。そして、たまに避難訓練をやっていた。安否確認訓練はほとんど、半分ぐらいしかやっていなかったということですね。ところが、東日本大震災のときに、じゃあ、どう機能したかというアンケートをとりましたら、75% ぐらいの組織がしっかり機能しており

ました。そして、何をやったかというと、消火をしたのではなくて、火事はあんまり起こらなかったということもあるんですが、一番頑張ったのは安否確認、安否確認は8割ということで、どこにおばあちゃんおじいちゃんが行ったか、どこにうちの子供が行ったかという、その安否確認にやはり一番エネルギーを注いだということです。それから炊き出し支援であります。意外とやっていなかったのが、避難訓練を6割以上やっていたにも関わらず、避難誘導ができたのは2割。それから救助活動は5%ということでございまして、ほとんどの方はやはり這々の体で、とにかくまず身の安全を確保するために逃げて、そしてその後に安否確認をやって、死なないようにということで食料を、炊き出し等を優先的にやっていったというようなことでございました。これが実態でございます。したがって、訓練と実際に行ったことには、やはり乖離がある程度あるということです。これはやはり実体験として、皆様ぜひ参考にしていただきたいというふうに思います。

やはり震災がありました、先ほどの講演でもお話がありましたように、まずは自分の命はまず自分で守るということを最優先に考えていく。津波てんでんこのお話があったかと思いますけれども、まさに津波てんでんこの発想というのが極めて重要だというふうに思います。

あと30秒になりました。ということで、宮城県はこういうことを経験いたしまして、地域のリーダーを少しずつ育てていこうという取り組みを今はやっております。個人の防災指導員、また企業の企業防災コース、企業の防災員を育てるというようなことをやりまして、それぞれのリーダーによってそれぞれの状況判断をしていただき、いろんな組織を正しい方向に導いていただく。そういうような組織づくり、リーダーづくりから始めていこうという取り組みをしているということでございます。以上でございます。

**○室﨑氏**

どうもありがとうございました。経験に基づいてコミュニティ防災のキーポイントを、極めて端的にお話しいただきまして、どうもありがとうございます。

続きまして、重川さん、よろしくお願いいたします。

**○重川氏**

まず、自己紹介を兼ねまして、私が勤めている大学は、ご覧のとおり富士山の麓にある、これがキャンパスになります。環境問題、それから防災問題を教える学部を持っております。私はここで防災を教えています。富士山の噴火とか、それから目の前が駿河湾、東海地震の巣になっております。そんな関係もあって、15年前に防災を学ぶ学部ができました。

ということで、私は防災を教えています。少し防災の枠組みの中で地域コミュニティ、自助、共助を考えてみたいと思います。まず、4つの対策、3つの目的と書きました。防災の中で対策は4つ、具体的には、1つ目が自然現象を理解するという対策があります。地震予知、火山噴火予知、気象予報など、地震学、火山学、気象学、こういった分野で進めている対策です。ところが、御承知のとおり、近年まるで予測のつかない自然現象が私たちの社会を襲うようになりました。なかなか自然現象を解明して、敵の姿を理解したいところなんですが、思うようにならないというのが現状で

す。

とはいいながら、その中で必ず災害は起きます。そのときに 2 つ目の対策です。まず、自然現象は止められないけれども、被害が出ないようにするという対策です。例えば建物を耐震化すれば地震が起きても壊れません。ばかでかく、大きな防潮堤を造れば、かなり大きな津波があっても防げます。そして、究極の被害を出さない対策というのは、危ない場所には住まない、安全な土地利用ということになるのかもしれませんが、これが 2 つ目の対策となります。

3 つ目です。そうは言ったって、それを上回る災害が起きたらどうするんだ。そのときに重要なのが、被害の軽減ということです。例えば防潮堤を造ったよ、でも津波は越えてやってきた。そのために命を守るために避難しよう、要援護者のために情報を伝えよう、そのときに備えて訓練をしよう、計画を立てよう、様々な対策がとられますが、これが被害を軽減する対策というふうに考えています。

そして、4 つ目が、この下に書きました、災害対応です。実はこの 1、2、3、いずれも災害が起きる前にやる対策になります。事前の備えです。防災が事前の備えが重要だと言われるのは、対策のほとんどはふだんやらなきゃいけない。そして、本番の試験が災害対応となります。どれだけ普段一生懸命考えているか、訓練したか、それが問われるのが実災害ということになります。

そして、3 つの目的です。1 つ目は、当たり前のことですが、命を守るという対策です。命を守るために防災をやる。2 つ目は、生き残った、幸いにして生き残った人たちの暮らしを守る、その後の暮らしを守る。食べ物を配る、避難所を運営する、医療機関に運ぶなどなどです。そして、3 つ目が、まさに今、東日本大震災で皆さんが一丸となって取り組んでいる、人と地域の再建、復興ということです。

私自身は、今申し上げた 3 つの目的、そして自然現象の理解はちょっと省きましたけれども、被害を出さない、軽減、そして実際の対応、それぞれの中に自助、共助、公助の役割があると思っています。そして、地域コミュニティというのはまさにこの共助になりますが、これを考えるためには、それぞれ自助、共助、公助、どういう役割があり、そこの中でなぜ、あるいはどこに共助が重要なのかということを考えたいと思っています。以上です。

**○室﨑氏**

どうもありがとうございました。ここの箱の中（注 : スライドの絵（74 ページ））がどういうふうに埋まるかというのが興味津々ですね。どうもありがとうございます。4 つの対策、3 つの目標という、防災の全体像をわかりやすく御説明いただきました。どうもありがとうございます。

続きまして、山下さん、よろしくお願いいたします。

**○山下氏**

日野ボランティア・ネットワークの山下です。よろしくお願いします。冒頭、平井知事が、この時間、15 年前はどこにいましたかと問われていましたけれども、すぐ近くの米子駅前におりましたと心の中でつぶやいておりました。それまで鳥取県と縁がなかったのが、たまたま 15 年前の今日、ある意味、縁がつながり、今ここにいるということにちょっとどきどきしています。

10 月 6 日ですので、少し当時の日野町の写真を

見ていただこうかと思います。このように倒壊した家もあり、倒壊はしていないまでも斜めになって全壊の判定で暮らせなくなった家があり、古くからの蔵の被害であるとか、それから、先ほど室﨑さんのお話でも高齢世帯等が弱いというお話がありましたが、家の造りとしてそういったところが被害が大きかったり、こういう状況がありました。

日野ボランティア・ネットワークは、この被害が大きかった日野町で、地域の住民の方はもちろん、外部から来たボランティアも含めて活動したそういうボランティア精神をいかにこれからに活かしていくかということで作った組織でして、本質は地域活動のネットワーク組織だと思っています。もう少しだけ具体的にお話ししますと、地震から半年後に結成して、一つは日野町内を拠点として、今でも被災後の地域づくり活動ということでずっと継続をしていて、もう一つは、災害の経験を生かすということで、県から委託を受けて今年 10 年になる鳥取県西部地震展示交流センターという場の運営ですとか、大規模災害時には被災地の支援活動などをやっております。こういったことを活かして、普段は地域活動とか、防災活動の取り組みの支援などを行っていますので、今日は日野町の立場と、各地の取り組みの支援をしている立場でお話をさせていただきたいと思います。ちなみに、各地の支援に出かけておりますが、たまたまですけれども、今日、村井知事が来られている宮城県に関しては、2003 年を皮切りにして、これまで 4 回の災害に関わってきております。

今日のテーマになっているコミュニティに関してなんですが、ちょっと日野町のことについて触れておきますと、まず西部地震のときの住宅再建と補修の公的支援というのが、物心両面で大きな支えになったということが、これは間違いないことだと思います。ただ、室﨑さんもよくおっしゃられる減災サイクルといったことを考えたときに、復旧復興からその取り組みが次の災害の備えにつながるということを考えたときに、ハード面で果たしてそれが強みになったかというと、ここは正直なところ十分ではなかったのではないかという気がしています。こういったところの背景としては、元々の高齢化、人口減少があって、地域がしんどい状況にあったと。そういう中で、日野町を初めとした鳥取県西部地震の被災地で何が求められたかというと、次の災害への備えとしてできること、人のケアとかコミュニティのケアというのが必要だったのではないか。ですから、今考えてみますと、日野ボランティア・ネットワークという組織とか、今日も来ておられます、日野町黒坂地区の自主防災委員会がやってきたのは、コミュニティを機能させて支えることによって、この減災サイクル、次の災害への備えといったことをしてきたのではないかなということも思っております。

地域コミュニティの防災とか減災についての現状と課題なんですけれども、高齢化と人口減少によって、防災の取り組みの必要性を話しても、「そんなことを言われても担い手がいない」と言われたり「やっぱり行政が守ってくれないと」と言われることがあるんですが、これは住民にも課題があるけれども、そうさせてきた行政の課題もあるんじゃないかなと思ったり、それからつながりが大事とよく言われますけれども、地域って難しいんですよね。つながりが大事なんだけど、それをどうするかということが課題。また、誰しもがやっぱり自分は大丈夫と思っている、こういったことがあるように思います。それから、西部地震の日野町で課題になったのは、被害が大きくても「自分のことは自分でやらないといけない」と言われる方がすごく多くて、これは大事なことでもあるんですけれども、高齢化が進む中では孤立化を生む可能性もあったんではないか。これはただ日野町に限らず、どこの地域でも関係性が希薄化していたり、助け合いの話を講演などでしても、離島であっても、助け合うと言われても顔を合わせる機会がないと言われるところもあって、こういうことをいかにやっていくかということが今、

課題になっていると思います。そして、防災に取り組む上では、自主防災組織、これはすごく大事なんですけれども、一方では、組織はあるんだけれども形骸化していたり、マニュアルは作ってあるんだけれども、昼間いない人が防災体制に入っているので、例えば昼間に災害が起こった鳥取県西部地震とか東日本大震災のときに担い手にならなかったり。それから自主防災組織という名前がハードルが高くて、高齢化が進んだ地域では取り組みにくいというイメージを持っていらっしゃったりするようにも思います。

こういった中で、今、重要なのは、先ほどお話しいただいたことにつながると思うんですが、災害時の支援はもちろん命を助けるということから始まるわけなんですけれども、その究極は元の暮らし、あるいは元の暮らしのリズムを取り戻すということにあって、これをしないといけないんだけれども、現状の災害対応のための取り組みはどうしても緊急対応、命を救うというところに重点がおかれていて、これはもちろん重要なんですけれども、命を守ったり支え合ったりという、地域コミュニティの力が必要になる部分に関する防災の意識というのは、まだまだ取り組む必要があるんじゃないかなということを感じています。以上です。

**○室﨑氏**

どうもありがとうございます。この減災の一つの解決策として、今、注目されているのが、外から若い人が転入してきて、その地域の人と一緒に支えていく、まちおこし隊だということです。復興の解決策では、復興のまちづくり支援員や生活支援員とかいう形で、外から入ってくる若い人が欠かせない。その先駆けですよね、山下さんは。地域を支えながら、地域のことを本当によく理解されているからこそ、今のような御報告がいただけたんではないかと思います。

同じように、地域の中に入り込んで頑張っていただいている智頭町の吉田さん、よろしくお願いいたします。

**○吉田氏**

智頭町社会福祉協議会の吉田と申します。幾分こういった大人数の前でお話しさせていただくことは慣れておりませんで、緊張しておりますがよろしくお願いいたします。私は、地域福祉というところを社会福祉協議会の中で担当しておりまして、主に住民の皆さんの福祉的な活動のお手伝いをさせていただいています。例えばふれあいサロンとか、高齢者の方のそういったサロン活動のミニデイですとか、ひとり暮らしの高齢者の方への見守りを兼ねたお弁当配りとか、そういったような見守り活動。あとは老人クラブだとかそういった団体事務の担当などもしております。ちなみに、私は山下さんと同じで県外出身でございまして、福井県出身です。鳥取大学を卒業した後に、縁がありまして今の智頭町社協に入って、今 6 年目になります。

智頭町なんですけれども、智頭町のほうも自己紹介をしておきますと、今、人口が 27 年度当初で 7,600 人ちょっと。私が入ったときが 8,000 人を超えていたので、この 5、6 年の間に 400~500 人の人口が減っているというふうなことになっております。高齢化率は、37% を今、超えているような状況です。世帯数が 2,700 軒あるんですが、そのうち高齢者のみの方の世帯が 891 軒ということで、3 軒に 1 軒が高齢者世帯。もっと絞って言うと、70 歳以上の独居の方、おひとり暮らしの高齢者の

方は306軒ということで、10軒に1軒が高齢者のひとり暮らしの世帯というふうになっております。

室﨑先生のテーマの一つで、智頭町で今、私自身が課題と考えているのが、やっぱり高齢化、少子高齢化というのが大きなところかなと思いますし、特に、これは引用してきたものになりますけども、国土交通省の国土のグランドデザイン2050。2050年の人口増減状況ということで、智頭町はこの鳥取県の南東、南の端っこの方にあるんですけども、無居住地化と、誰も人が住んでおられませんよというところが幾つか出てくるだろうというふうに言われていると出ております。智頭町は、小規模な集落が結構多いんですけども、そういった中でどういうふうに防災並びに生活課題、福祉的な課題もどういうふうに皆さんで解決していくかということを、常日ごろ懸念をしているところです。

もう一つが、そんな中で、智頭町の地形的な課題なんですけど、これは那岐駅前という集落の写真なんですけども、やっぱり山際まで、村の近くまで山が迫ってきていると。至るところに鳥取県さんで立てていただいた、危険だよという土石流危険渓流ですとか、急傾斜地崩壊危険箇所といったような看板が、本当にいろんなところに立っていると。イエローゾーンとかレッドゾーンといわれているところが、もうほとんどの家がかかってきておりまして、智頭町ではこういった集落、珍しいところじゃなくて、本当90集落近いところがもう皆さんこんな感じと。土砂災害だけ絞っている地図にはなりますけども、こういった危険が迫る中で、また少子高齢化が迫る中で、どのようにみんな助け合っていくのがいいのかということを考えながら、また後で活動紹介をいたしますけども、そういった中をどういうふうに解決していくかを日ごろ考えながら活動しているところです。私からは以上です。

**○室﨑氏**

どうもありがとうございました。まずは、危険が一杯あるんだぞという、現状のお話をしていただきました。今の問題をどう解決するかというのは、また後半でしっかり議論したいと思っております。

じゃあ、続いて平井知事、お待たせいたしました。よろしくお願いいたします。

**○平井知事**

本日は、こうして皆様にお時間をいただきまして、室﨑先生、重川先生、そして村井知事にお越しをいただきました。また、地元からも、今もお話聞いていただきましたが、山下さんや吉田さんという若い力がこうやって奮闘していることを聞けて、本当にありがたいなというふうに思っております。

最初に自己紹介ということですが、今さら何をと思いますんで、私は村井知事の友達の平井と申します。同じ知事という仕事をしておりまして、そういうわけで、今日、こちらの方に快く来ていただきました。残念ながら、今日もうすぐに帰られるということでございますが、村井知事は、時々鳥取に来られています。前回お見えになったときに、私にしゃべるとどこか連れて行かれるから危ないということで、一切私に知らせずに来られたんですが、いたく気に入っていただきましたのがベニズワイガニでございまして、ベニズワイガニ、値段が安くておいしいと本質をよく見ておられます。鳥取県は今、蟹取県に改名をしましたので、これからもまた宮城とタッグを組んでやっていき

たいと思います。

宮城の村井知事には、私も思い出がありまして、東日本大震災の日、平成 23 年 3 月 11 日。私のほうは何をしていたかというと、ちょうど知事選挙の 2 期目に出るために記者会見をしていたところでございまして、ああいうだんだんと状況が悪くなって、記者クラブ自体が少しそわそわし始めるというような状況でございました。私はその日は、夜、職員の皆さんにお願いをして、応援の仕方を考えなきゃいけないと。東日本大震災の応援の本部を作ろうと、県庁に夜遅く集まって、どうしたこうしたということをやっていました。例えば避難される方の物資が要るだろうかとか、それからヘリコプターの手配が要るだろうかとか、そうしたことを我々なりにシミュレーションして、自分たちの地震のときの経験を踏まえながら動き始めておりました。

村井知事にお電話をしよう、連絡をとろうとしても、当然ながらなかなかつながりませんけども、役所同士というのは一つ便利な手段があって、防災用の無線があるんですね。それで宮城県庁の知事室のほうにつながる手段がございまして、夜中の 11 時過ぎだったと思います。ようやくつながったときに、村井知事は今、宮城県庁の中を歩いておられますということでありました。なぜか、県庁自体が丸ごと避難所になっていたんですね。避難された方々をお一人一人声をかけて、その晩、歩いておられました。帰ってこられて、電話がつながりまして、大変だねということを申し上げました。気やすいもんですからそういう話をさせていただいて、鳥取県は平成 12 年 10 月 6 日に地震があって、全国の皆様に本当にお世話になった。その恩返しをするときが今来たと思うんで、ぜひ何でも言ってくださいと。避難の物資でも何でもということを申し上げました。そうしたら、村井知事の方からも、じゃあ、こういうことをということで御指示がございまして、それで物資を運んだりという手配も始めたんですね。その時に、村井知事の最初の第一声、今でも耳にこびりついています。「平井さん、ついに来ちゃったよ」と言ったんですね。まるで、アルマゲドンのような印象を持ったんですけども、実際、私も見ていて、これはただごとではないと思ってましたから、そうだなと思いました。私らの商売はそういうことが一つあると、もう夜も寝られなくなります。村井知事が偉かったのは、ずっと防災服をしばらく着ていました。亡くなる方がみんな見つかるまで、自分は防災服を着ているんだ、こういうようにおっしゃって、決意を固めて災害対策に当たっておられました。

そんなわけで、鳥取県から物資が、その晩にもう既に手配をして出かけていきまして、後日、宮城県の河北新報というところに掲載をされた社説に、全国の自治体が宮城に応援を送ってくれたと。一番早かったのが、あの遠い鳥取県だと書いてくださったんですね。びっくりしましたけども、そんなようないろんな御縁があります。共通するのは、私たちは同じ災害を経験したということであり、その災害を経験したからこそ、やらなければいけないのは、本当に強いまちを創ること、防災の仕掛けを私たちは作ることだと思っています。

思い出していただきたいと思います。15 年前、この日に何をしていたのか。先ほど山下さんは、駅前におられたというふうにおっしゃっておられました。それぞれ皆さんも思い出があると思います。とんでもなく物が落ちてきましたから、あの右往左往した思い出。表に出てみると石垣が波打ったと、あの時よく言いました。石垣が波打つようにして凶器に変わる。米子のまちの中でも、やはり塀が倒れて、ブロック塀の下敷きになってけがをされた方もいらっしゃいました。実に 141 名の方が重軽傷です。全半壊 2,888 棟、避難された方約 3 千人。今もう忘れかけていますけれども、それが災害なんです。

そういう時に、じゃあ我々はどうしたらいいのか、その経験を活かそうということだと思うんです。例えば、当時いろんなところで講演をされていた日野病院の副院長さんがおられました。岡野

副院長さんでしたかね。日野病院は、震災の震源地に近いところ、根雨にあります。それで、病院の方に副院長先生は、昼御飯、もう近いですから、家に帰って、1時半でしたか、昼御飯を食べて病院に戻ったら地震に遭ったと。もう立っていられないんで、何かにつかまって、病院に入るのを前の階段で待っていたと。職員がいろいろ動き始めたわけで、一番困ったのは停電です、停電してしまったと。命を守んなきゃいけないんです、病院は。そのときに、職員の方が気がついたんですね、目の前の保育所の電気がついていると。非常灯が点いていたんです。そちらのほうに、痰の吸引の機械を使わなければ生きていけない人たち、そういう方々8名をそちらの方に逃がしてあげた。さらに、隣の日南病院の高見院長さんと話し合って、そちの方に転院をさせようということを目論むんですが、なかなか手配がつかないと。中部の方から救急車が回った頃には、もう既に別の経路で動いていたというようなことでありましたけれども、そういうようなことを経験しました。野戦病院のようだったというふうに、よく当時も言っておられました。幸いなことに、日野病院が建て替えの真っ最中だったもんですから、その後すぐ新築の日野病院に入るということができましたけれども、そういうことがあったわけです。また、銘々のお宅の方でもいろんな御経験をなさったと思います。先ほど吉田さんとか、あるいは山下さんの方から御示唆がありましたけれども、田舎だからといって、お互い顔を見知っているわけじゃないんですよね。ですから、そこの絆をもう一回つくり直さなきゃいけないわけです。

先般は平成22年の大晦日から大雪が降りまして、この米子も大変雪が積もりました。交通が麻痺しました。あの時に助け合いということが全国で話題になりました。鳥取県では、国道9号で約1千台閉じ込められたんです。宮城県の仙台とは違うんです。自動車が1千台閉じ込められた。1千台閉じ込められて、沿道の人達が、お正月ですから、例えばおまんじゅう屋さんがあったんですけども、そのおまんじゅう屋さんがお正月は売れるんですね、お土産で。そのおまんじゅうを配って、自動車に差し上げたとか、周りからコンビニがおにぎりを提供したとか。もちろん私も地元の町長さんに電話をしたら、もう既に日赤の女性たちが今、炊き出しをやっておりますということで、それでそれを持って行って、それがまた朝日新聞初め各紙で取り上げられて、鳥取というのは何と心の温かい所かというふうにも言われました。あの時に、非常に良かったかなと少し思うのは、米子の中でなかなか除雪が追いつかなかったわけですね。当時、野坂市長と会うと、「わしは今あっち行ってもこっち行っても叱られとる」と、「雪かきもできんで」とか言われて、本人が自虐的に悔やんでおられましたけども、なかなか手が回らないわけです。その時に、近所中で皆さん出て雪かきをされましたよね。そうしたら、普段顔を合わせない人が分かったということをよく言ったもんです。これが大切なんだと思うんです。

鳥取らしく生きていけば、鳥取らしいコミュニティができれば、自助、公助と合わせた共助、ここのところができやすいのかもしれません。例えば電気がないということで困るということであれば、今、県内では既に病院のうちの半分ぐらいは自家発電を持てるようになりました。また、県庁でも、いざとなったら自家発電の機械を回せるように予備で買っていたりします。そういうふうにして、一歩一歩対策を打っていくことだと思うんです。せっかく私たちは辛い経験をしたんですから、その時に失うものもあったんですから、それをこれからの災害対策に活かさなければならないと思っています。今日は、皆さんといい意見交換ができればと思います。本当にありがとうございました。

**○室﨑氏**

どうもありがとうございます。いろいろ大切なことを話していただきました。重要なポイントは、大きく言うと2つですね。一つは、地域を越えた

県と県との助け合いがいかに大切かということ。鳥取県は、徳島県とも非常にしっかりスクラムを組まれてるので、そういう経験も踏まえて、県と県の助け合い、すなわち「大スケールの助け合い」が必要だということです。

もう一つは、地域の中での「小スケールの助け合い」が必要だということ。車でたまたまそこを訪れた人を、そこの地域の人が助けるような、身近な助け合いが基本だということを話していただいたように思います。

どんな問題があるのかについて、山下さんと吉田さんから出していただきました。それをどう解決したらいいのかという大きなフレームは、重川さんから示していただきました。その対策の中の重要なポイントとして、村井知事さんからは、日ごろの訓練をしっかりしておかないといけないということを、平井知事さんからは、日ごろの人のつながりだとか共助だとか助け合いがとても重要だということを、お話いただきました。

そこで、村井さん、平井さんから少しこれからの方向はかなり出していただいているので、そのあたりを少し頭に置きながら、次にどういう対策をしていくかについて、これからお話をいただきたいと思います。まず地元の山下さんと吉田さんからお答えをいただいて、それを踏まえて今度は重川さんに要点を押さえていただいて、最後に 2 人の知事さんから思い切っていろいろ提案をいただくというふうに進めたいと思います。

山下さん、よろしくお願いいたします。

**○山下氏**

先ほどお話ししたことと重なるんですけれども、何が必要かと考えた時に、究極は災害が起こっても誰もが助かるためにはどうしたらいいかということと、それから誰もが元のような暮らしを取り戻せるためにはどうしたらいいかということを、徹底的に考えるということが突きつけられているんだと思っています。簡単に言えば、直接的に防災を意識した取り組みと、それから、特に暮らしを取り戻すと考えたときには、防災、減災を意識した日ごろからのコミュニティ形成が大事という、ここに返ってくると思うんです。ただ、とても難しいのが、つながりが大事なことは誰も分かっているんですけれども、やっぱり簡単ではないんですよね。昔みたいに一つ一つの世帯が複数世代でなかったりすると日ごろからの交流が少なかったりということもありますし。こうした状況で、地域の役員さんとかにつながりが大事、それを支えるのがあなたたちの役目ですということを余り言い過ぎると、地域でそういうことがうまくいかないのは自分たちの責任じゃないかという罪悪感を持たれといったこともありますので、そのあたりはかなり気をつけながら取り組みを進めていかないといけないと思っています。

こういったことをはっきり言う自信がつくのは、いろんな被災地で学ばせていただいているんですが、これは宮城県の 2 つの社協の方が言われた言葉なんですが、石巻であの災害で被災をした社協職員が、被災による課題は生活課題の一つというふうに、これは苦渋の発言だと思いますけども、言い切っていました。つまり、津波で家を失ったとか、もちろん大変です。それから津波で浸水しても大変、津波は来ていないけれども地震被害があった人も大変。そういう災害、直接的な被害は小さくても、内陸部であの災害で苦労している人もいるといったことを、しっかり見ていかないといけないということを言われていました。もう一つある社協職員から聞いたのは、仮設住宅からだんだん復興住宅に移ったり、元の地域に帰っていくという時に、少なからず「仮設のままがいい」と言う方がおられるということです。仮設住宅にいると隣近所が近いし、それから話ができる場があるし、よそからいろいろボランティアの人がお楽しみの催しを持ってきてくれたりして、寂しくないということなんですね。こうした発言を聞いて、この社協職員が言っていたのは、今までの地域って一体どうだったんだろうかということと、これからの地域はどうでなければいけないのか

ということを考えていかないといけないと言われていました。こういうことを考えていくと、災害で命が助かったということで、よかったよかったということにはそれだけではならないんではないか。特に大きな被災地で、こんなことだったら助からなきゃよかったというような言葉を聞くことがありますが、そういったことを少しでもなくしていくためには、いかに支えていくかということが大事なんじゃないかなと思っています。

若干話は飛ぶかもしれませんが、こういういろんなことを考えながら、一昨年度から、鳥取県庁の防災部局、福祉部局、それから市町村の防災部局、福祉部局、そして社協、日野ボランティア・ネットワークが一緒に取り組んでいることがあります。考えたのは、こういうことを突破していくためには、乗り越えていくためにはどうしたらいいかということを考えたときに、結局、地域の住民それぞれが担い手となるということを考えていかないと、防災ということもないんじゃないか。その時に大事なのは、地域の課題であるとかどうしていきたいかということをみんなで共有した上で、周りからこうやったらいいよではなくて、自己決定をするということが一つ。もう一つが、自分たちが担い手、プレーヤーとなるということをやっていくことが大事なんじゃないかということです。ただ、これも気をつけないといけないのが、住民でやることこそが大事ですと全部押しつけるのではなくて、こういったことが進むように、行政とか関係機関がしっかり支えていくということが大事なんじゃないかなというふうに思っています。

もうちょっとだけ具体的に言いますと、地域の中で住民が集まって、簡単に言えば話し合いをするということなんですが、例えば地図を広げて、地図の上で地域の課題を共有する。それから、それぞれ今、健康状態であったりとかそういったことを話し合いをして、その中には防災によるリスクのことも含めて、もし災害が起こったときに、それぞれがどういう行動をとるかとか、そういうことをしっかり話をしていくことが重要なんじゃないかということです。この事業をやるために、地域の中でそれぞれがこういう話し合いをやるといっても、それぞれ皆さんやってくださいと言いさえすれば簡単にできるものでもないので、各市町の福祉関係あるいは防災関係の担当者がそれを支え、ただ、各市町だけでは苦しいところもいろいろ出てきますので、県域でこれを支えるといったこういった事業をやっています。ちょっとこれだけでは分からないと思うので、もっと具体的な内容は、一緒にやっている智頭町の吉田君が後でお話をしてくれます。

地域において、こういった話し合いをする意味合いというのは、これは鳥取県内の事例じゃないんですけれども、果たして今、災害が起こったときに、常識的な対策だけを考えていてもいいのかとはっとさせられたことがあったのです。これは2013年の山口県萩市の被災地で話し合いをした内容なんですけれども、前年の被害があった時、それから30年前の被害があった時にどうだったかということを話し合った結果、町内会で決めたそうです。不安な時に昼夜問わず一緒に過ごす御近所さんを決めたそうなんです。これはすごいことじゃないでしょうか。何十mの防潮堤を造るとか、すごい立派なマニュアルを作るということではないんですが、今、地域の関係の中で、昼夜を問わず御近所さんが一緒に過ごすという、このことをこの地域で話し合った結果としてこれが一番安全だというふうに選択をしたという、これはすごいんじゃないかなと思っているんです。こういうふうないろんな決め事というのを、地域の中でいかに話し合って決めていけるか、こういうことが重要なんじゃないか。こうした取り組みを進めるときに、みんなが対象ということを考えると自治会だったり、あるいは市町村という地縁組織の枠組みが重要なんですが、これがなかなか難しいときに、自治会が難しいからできないではなくて、老人クラブでやるということもあれば、地域の活動団体とかボランティア組織でやるという方法もある。

実際に、この事業を江府町では福祉サロンとかの場を活かして、今やっていますけれども、そういった場を活かすというやり方をとる。あるいは、単一で難しければ、集落間とか市町村間の連携をしたりとか、それから集落外、あるいは市町村外の力を活かす。これは、例えば移住定住者も含めた地域であるとか、交流人口を含めて考える。こういったことをひっくるめて考えていくということが重要なのではないか、ただ、気をつけないといけないのが、外の人たちにただ期待をするということをやっても駄目で、今住んでいる人と新しく増えてほしい人達が、いかに融合するかとか一緒にやっていくかということをいかに考えていくかということが重要なんじゃないかなというふうに今思っているところです。

**○室﨑氏**

どうもありがとうございました。豊富な内容をお話しいただきました。それをこんな形で強引にまとめていいのかなとか思いますけど、担う人とつなぐ人と支える人、この 3 つがしっかりいないとうまくいかないんだということですね。特に、つなぐ役割を一体誰がうまく果たすのかが、問われている。小さな集落でもお互いになかなかつながらないので、つなぎ手の役割、あるいはつなぐ場をどうつくるのかというのがとても大切だなと思いました。どうもありがとうございます。

吉田さん、山下さんが宿題も投げかけられていますけど、よろしくお願いいたします。

**○吉田氏**

今、「つなぐ場をどうつくるか」というお話しでしたが、先ほど山下さんから話がありました「支え愛ネットワーク事業」についてお話しします。智頭町では、平成 25 年度に、役場の防災ですとか福祉包括支援センター、そして私たち社協がネットワークをつくって、住民さんをサポートしていこうと、ネットワークづくりをしていこうというような事業が始まりました。じゃあ智頭町で何をしようかなというような話になったときに、取り組んだのが「わがまち支え愛活動支援事業」でした。これもまた県の事業になるんですけども、「防災福祉マップ」という、県内では「支え愛マップ」というような名前で実施されているんですけども、こういったものを作りながら、障がい者ですとかお一人暮らしの高齢者の方々、要援護者といわれる方々への災害時の避難支援の仕組みですとか、それだけじゃなくて、平常時の見守り体制をどうつくっていくかということを一緒に考えましょうというような、集落、町内会対象の事業がありましたんで、これを使って、先ほど言った福祉、防災、社協のネットワークで地域に入っていこうよというようなことで、24 年から始めていきました。

今、話に出ました防災福祉マップ、支え愛マップというものなんですけども、先ほど出ていた鳥取県がつくられた鳥取 Web マップ、ハザードマップには、危険な場所ですとか、家がどこにあるか、川がどこにあるかということは書いてあるんですけども、誰がどこに住んでおられて、どこに助けが必要な人がいて、どこに助けることができる人がいるかということは書いていませんよねと。これは行政サイドはなかなか難しいですよ、住民の皆さんが一番知っていることですから、これを地図に落としていきましょうよというのを、防災福祉マップづくりということでさせていただいております。町内にある住民にとっての危険な箇所や不安な箇所、避難場所とそこへの経路、手助けが必要な人、心配な人を住民の皆さんで一緒に考える、そんな場を作りましょうということでやっていきました。実際に、できたのがこういうマップになるんですけども、多分やられたことのない方は、何が書いてあるか分からないと思うんですね。体験型のマップなのかなと。作りながら、皆さんで話しながら、「この家のおばあさんがちょっと心配だなあ」とか、そういったことを場で共有していくというような、そういうふうな趣旨のものになっています。

この取り組みなんですけども、対象の87集落のうち33集落で取り組みが続いておりまして、約3分の1以上が取り組んでおられます。参加者なんですけども、いわゆるこういうハザードマップ、防災マップとかというものは、得てして班長さんとか区長さんとか、そういう役員さんで作られる所もあるかなというふうに思うんですけども、智頭町ではいろんな人に参加していただきましょうと。若い方から、役のある方から役のない方まで、子供たちですとか、先ほど山下さんからもありましたけども、移住してきた方。智頭町は結構移住してこられる方が多いので、そういった方もみんな巻き込んで。その中には要支援者といわれる方ももちろん参加しておられます。支援していただく側として、いろんな方に協力していただいているわけなんですけども、山下さんがおられる日野ボランティア・ネットワーク、同じ山下さんの仲間の森本さんは本当にずっと入っていただいていますし、他にも県ですとか町、いろんな所で関わっていただいております。

ここから実際の写真を見ていきたいと思うんですけども、マップを作っていく中で、実際に村の中を歩いてみましょうというところの風景がこれです。これはよく分かるなと思ったのが、若い方も、老人車というか車を引いておられる方も、子供さんも、杖をついておられる方もみんな参加しておられます。いろんな自分のペースで歩いておられるんですけども、この歩いているところを動画でちらっと見ていただこうかなと思うんですが、よろしいでしょうか。五月田の動画を。

〔ビデオ上映〕

おばあさんが杖をついて、坂道を上がっていきます。怖いことはないそうです。普段危ない谷、谷水が溢れるような所を見に行っているところです。じゃあ、そろそろ止めていただいて、ありがとうございます。ちょっと雰囲気を見ていただきたくて動画を流しました。

皆さんそれぞれ、もしかしたら人によっては今の方を要支援者だという方もおられるかもしれないんですけど、今のおばあさんは自分は支える側だと、人を助ける側だというふうな意識で、自分も危険な場所を見に行くよというふうなことでやっておられます。本当いろんな方が参加されているわけなんですけども、この映像を、この間、智頭中学校の家庭科の授業で見ていただいて、中学生が面白いこと言っておられたんですけども、「おばあさんを置いてきぼりにしてるじゃないか」と。歩くペースが違うことを中学生の子が気づいてくれて、「いやいや、それは大事なことだよね」と。「歩くペースが違うということは、多分避難をする時のペースも違うだろうし、だったら気遣って助け合ったりということもできるよね」というようなお話をさせてもらった次第です。ちょっと話がそれましたけども。

**○室﨑氏**

どうもありがとうございます。鳥取県のとても大切な取り組みが、先ほど平井知事さんも触れられましたが、支え愛の活動ですよね。マップづくりで重要なことは、個別的、具体的な問題を発見すること、誰が誰とどこに行くのかという役割を相談して決めることです。ざくっとしたハザードマップの取り組みではなくて、身近な我が事としての取り組みがそこに生まれているということです。とてもいい取り組みを御紹介いただき、どうもありがとうございます。

じゃあ、重川先生、お二人のことを聞きながら、少し総論的に対策の在り方をお話しいただければありがたいなと思います。

**○重川氏**

今まさに、山下さん、吉田さんから、要援護者を含めてどうやって生き延びるのか、避難をするのかというところの取り組みの御紹介がありました。一つ目の目的の、命をどうやってみんなで守り合うかというところだと思います。今日は鳥取

県西部地震 15 年ということでしたので、地震という災害、自然現象を念頭に置きますと、この三つが人の命を奪う憎い敵なんですね。一つは、揺れそのものです。揺れに伴って建物が壊れ、下敷きになってたくさんの人が亡くなってしまうといったような場合。それから、二つ目が津波です。そして、三つ目が火災です。これは日本だけでなく、世界のどこで地震が起きても、たくさんの人命が奪われてしまうのはこの三つの被害が要因になっています。

じゃあ、これから私たちはどうやって命を守るかということを考えればいいわけなんですが、さっきの役割分担表に戻ります。命を守るときに自助、共助、公助、これはあくまで私の考えです。皆様がどう思われるかはそれぞれお考えいただきたいんですが、先ほど山下さん、吉田さんから御紹介いただいたのはまさにここです。土砂災害が起きた時、地震で避難が必要になった時、被害が出てしまっても命を守るためには共助が一番重要なんだ、私もそういうふうに思っています。この共助というのは、放っておいてできるわけではないと思ってます。共助のネットワークを作るには、まず自分自身が働きかけていく。自助で共助のネットワークを作っておく。ただ黙って座っていれば誰かが助けに来てくれる。あるいは、コミュニティが崩壊する、疎遠になるというのに、自分は何も積極的に参画しないというのはやっぱり間違い。自分の努力があって初めてこの共助というものがしっかり機能するんだと思っています。

例えば具体的には、これは今まで何度も言われていることですが、阪神・淡路大震災では下敷きになった方が数万人いらっしゃいましたけれども、いわゆる制服組が救助をした人よりも、圧倒的に市民が救った人が多かった。あるいは地震の後に起きた火災、同時火災では、これは兵庫県の西宮というところですが、41 件出火しましたけれども、7 割の火災現場を市民が初期消火をしています。結果的に、西宮は延焼火災ゼロ、火災による焼死者は出ませんでした。なぜこんなに初期消火ができたかというと、ちょうど昭和 50 年代半ばから、西宮では防災市民組織づくりをやっていましたが、組織の結成率を高めることが目的ではなく、具体的な消火の方法、市民が消防団と同じように、いざという時に動ける訓練をやっていた成果がはっきりと現れたのが 20 年前の震災でした。

そして、この時の共助がどういうふうに機能していたかということなんですが、当たり前のことなんですけれども、共助に参加するためには、まず自分の身が守れていた。それから自分の家族が大丈夫だった。よく共助、共助と言いますが、共助が機能するにはまず自分自身が無事でなきゃいけない。そして、その時のネットワークというのは、実は非常に狭い狭いネットワークでした。まさに向こう三軒両隣、自分ちが大丈夫だったら隣の人に目を配る、声をかける。自分ちと隣で足りなきゃ大声を出してその次の人を呼ぶというふうに、小さな小さなネットワークで何とかそこを乗り越えていくということが分かっています。

もう一点だけ強調させていただきたいんですが、実は自助のとこに丸をつけました。命を守るための自助、特にこれは被害を出さないところでは、まさに自助努力が大切だということです。具体的には、住宅の耐震化、あるいは家具の固定、あるいは危ないところには住まないなどなどを含めて、まず命を守るためには、実は自分自身で被害の抑止対策をしておくということが一番大事です。でも、それを上回る災害が起きた時には、まさに共助の力によって被害軽減、避難の支援とか、そういったことが重要になる。

そして、知事がいらっしゃる前で大変申しわけないんですけれども、命を守るという段階で公助にできることは、事前の被害抑止対策です。例えば道路、防潮堤を整備する、学校の耐震化を図る。まさにここは公助が非常に重要な役割を果たします。ただ、実際に災害が起こってしまったとき、特に命に関わる問題については、残念ながら公助の手はなかなか及ばない。まさにここが非常に重要になってくる。そして、これを機能させるため

には、事前の備え、自分自身が助かるという自助が重要になる。命を守るというところでは、こういう役割分担があるんじゃないかなというふうに考えています。

**○室﨑氏**

どうもありがとうございました。命を守る上で自助と共助と公助の関係で、特に自助と共助というのはとても大切だというお話をいただきました。

3人の皆さんからいろいろ御発言をいただいたので、それを受けて、お二人の知事にご意見を伺います。村井さんの場合はもういろんな体験をされていますので、その体験を踏まえたお話が伺えると思います。村井さんから、ここが重要だというお話をお伺いできればと思います。よろしくお願いします。

**○村井氏**

私が言おうと思って準備してきたことにつきましては、三名の方がほとんどお話しされました。三人の方がお話しになったことがまさにその通りだと思います。一つだけ、ちょっと全然違う視点で、先生、よろしいですか。

私は、今回の震災を受けて、つくづく昔の人の生活の知恵と申しましょうか、昔の人は本当に偉かったなあと、賢かったなあと思ったことがございました。それを地域コミュニティということも含めて、防災対策でお話ししたいと思います。と言いますのは、私が自衛官のときに、住んでいた所のすぐ近くに、ずっと内陸の方なんですが、内陸というか海から近い内陸の方なんですけど、海は見えないような場所です。そこに浪分神社というのがあるのです。その浪分神社は実はもっと海の近くにあったんですけれども、移転したということを聞いて、どういうことなのかなと関心は持っていたんですけれども、震災後それはやはり津波を意識してつけた名前だというのを聞きまして、昔あった場所のところに行ってみました。やはりその神社のすぐ手前まで津波が来ているんですよ。津波はそこまで来ていない。それから、じゃあ古い神社はどうなんだろうなと思って調べたら、古い神社は、古ければ古いほど海の近くにあっても高台にあったりいたしまして、あと海からぎりぎり離れていて、そこに津波は来ていないんですね。昔の方は早い話、字がほとんどの方は読めませんでした。そして、建物をどんどん作ったり壊したり、それにそんなに長持ちもしません。でも、神社というのは神様が宿っているわけですから、簡単に壊すわけにはいかない。壊れたら必ず修復をしなければいけない。そして、誰もが必ず足を運ばなければいけない。また、春、秋には例大祭、お祭りをします。夏には夏祭りをやる。みんなが喜んでそこに集まるわけです。それが知らぬ間に避難訓練になっていて、そこに人々が集まる、集うようになっていたということです。それはまさに私は昔の方の生活の知恵だろうなとつくづく思いました。

先ほど、一番最初に私、ここでお話しさせていただいたときに、最初の1回目の発言の機会の時に、宮城県は防災組織はほぼきちっとできていた。そして、防災訓練も大体ほとんどやっていた。しかし実際は、被害が全く想定外でありましたので、防災訓練の通りではなくて、逆に余り防災訓練をやっていなかったようなところで安否確認、あるいは炊き出し、こういったようなことをきちっと皆さんが自主的に動き出したという話をしました。ですから、リーダーが必要なんではないかというお話をしたということであります。最低限自分の命、今もお話しいただきましたけれども、自分の命を守れれば、そこからまた新たなコミュニティが発生して生き延びることができるということです。

先ほどの智頭町のところで、地滑りの危険箇所が標示されているというような話がありました。15年前の地震の後に、この間、宮城県が襲われたような台風が来て大雨が降ってしまったら、間違いなく地滑りという危険が非常に高まったんじゃないかなというふうに思います。そういった時に、

地震でとりあえず命は助かったが、それでいいではなくて、そこから次のステップとしてどうやって命を守るのか、二次災害を防ぐためにどうすればいいのかということを考えていくのは非常に重要だというふうに思います。そういった時に、そうした昔の人の知恵、昔の方が行ったようなこと、こういったようなことを参考にしながら次の対策を考えていくというのも極めて重要じゃないかなというふうに思いまして、宮城県は防災指導員を育てる際には、そういったことも入れながら教育をするようにしているということであります。以上です。

**○室﨑氏**

どうもありがとうございました。昔の知恵をしっかり継承していくというか、伝えていくということはとても大切だという話で、神社の話はとても参考になりました。単にお宮にお参りするだけじゃなくて、それがもう避難訓練そのものだし、人のつながりの場を作るものだし、いろんな多面的な機能を持っている、それが防災の根底、基礎をきちっとつくっているんだというお話は、とても重要なご指摘です。どうもありがとうございました。

平井知事さん、まとめ的にお話しをしていただければありがたいと思います。

**○平井知事**

今、一つにはやはり歴史に学ぶとか、まず情報をきちんと整理をする。それから自分たちでもできることをやる。そこに公の様々な政策も必要だし、自ら律して自分の家の耐震化などを進める等々いろんな御意見が出ました。あまり重複しないようにお話をさせていただければと思います。大切なのは多分、山下さん、吉田さんからもお話があった、実は鳥取県が今、進めようとしている「支え愛のまちづくり」。これは要は、地域福祉というのは最大の防災だと思うんです。地域福祉を進めるというのは、それは日常を支え合う暮らしを創るってことでありますけども、災害の時に効果を発揮するのはそのことです。ですから、そういう意味で災害対策だとか、あるいは日常の高齢者のケアということを融合してやっていくのが、多分合理的ではないかなということで、今、我々支え愛の基金をつくりまして、ここにお金を積んで、そこから支援措置をやっていると、そういう非常に独特なことをさせていただいております。

ただ、まず一番、前の地震以降、我々も注意をしているのは、やっぱり情報の問題があると思うんですね。その情報をきちんと明らかにして、それをお知らせするという仕組みをつくらなければいけない。そういう意味で、さっきハザードマップの話がありました。これも今、市町村の御理解も得ながら、だいぶ市町村での共有化も図られてきているわけです。赤く囲ってあって、土砂災害危険区域というのがありまして、看板も立てる。今あちこちに立てて、鳥取県の場合ほぼ全て指定も終わっていまして、あと日野郡のほうの一部でちょっと事情があって少し遅れているところがありますけども、ほぼ終わっています。

ちなみに、私が住んでいるところも土砂災害の危険区域でございまして、知事に就任して入居しました。そうしたら、途端に静かになったんですね。もちろん周りが山ですから、夜になるとフクロウが鳴きますし、職員はいないもんですから、家内と 2 人で公園の管理人みたいだなとか言っていたわけでありますけども、電話も鳴らないんですね。携帯電話が鳴らない。なぜかなと思って、1 週間 2 週間たって気がつきました。旗が立っていなかったんです、不感地帯だったんです。ドコモの電話だったんですけども、この話をあちこちで言ったらドコモがすっ飛んできて、そこからひと月ほどでつながるようになりましたけども、ともかくそんなようなことがあるぐらい、実はそういう災害の危険ということはあるんですね。

鳥取県の場合、何が危険かということをやっぱり考えるべきです。それはまちによっても違いますし、地域によっても違います。尾池先生という

京都大学の総長をされた先生がこちらに来られまして、その時に米子の方が手を挙げられまして、「今、米子の公会堂を建て替えるべきかどうかという話があるけれども、先生のお話だと鳥取県は一番リスクが小さいということであって、建て替える必要はないんでしょうか」というふうに質問をしましたら、尾池先生、行きがかり上、「ありません」と言っていましたけど、これはここだけの話でありますが。ともかく、ですから地震のことは確かにあるんですが、この間も京都大学の若い先生が調べておられましたけど、あれは他のところ並みにやはり心配しなきゃいけないということであって、例えばトラフがある、プレートの境界というのはここにはありませんので、プレート境界型の地震は起きません。しかし、先般、鳥取県西部地震がありました。あれは横ずれ断層でありまして、東西からの力の応力がかかった。南北が 20 キロ、幅が 10 キロの左横ずれ断層というタイプの断層です。それは表面に断層がないんですね。地中でございまして、そちらの方が動いたというふうに思われるんですが、活断層ではないんじゃないかというふうにも言われていますけれども、フィリピン海プレートだとか日本海側のアジアのプレートだとか、この辺にはそういうプレートがないわけでありますから、プレートの境界で発生するような大きな地震は遠いです。しかし、域内の地震というのはあり得る。そういうことをまず頭に入れておく必要があるだろうということです。ただ、南海トラフのようなことはやや遠いです。

津波はどうか、津波についても、鳥取県は平成 23 年の東日本大震災の後、独自にシミュレーション調査をしました。この沖合には鳥取沖西部断層があります。また、鳥取県沖東部断層があります。これが近い断層です。ここから起こる津波で、大きいところは、鳥取市のほうが大きいんですけども、14 分後ぐらいに、大体 6.3m ですか、そういう津波が来る可能性があると当時はじきました。ただ、もっと大きいのは、遠いですけど佐渡島の北の方から来るものです。向こうにはプレートの境界があるんですね。ですから、秋田沖地震だとかいろいろありまして、津波が問題になったことがありますよね。あの地震が起きた時の津波の方が大きいというシミュレーションになりました。大山で 7.6m、ただ、2 時間半ちょっとかかります。そういうようなことがシミュレーションで出てきました。最近になって、ようやく国のほうにも日本海側の断層を調査せいとだいぶ言いましたら、昨年それが出てきました。鳥取県がシミュレーションしたよりも随分、全体としては津波の高さは減っています。ですから、鳥取県が前にシミュレーションしたのが多分マキシマムであって、もしかするとそれも随分小さいのかもしれません。ただ、あちらの村井さんのところでは、女川でも 14m 津波が来たとか、今、高知のほうで言っているのは、30m とか 50m とかでありますから、それと比較していただくと、津波についてはそういう程度の被害を頭に入れておく。一生懸命標高表示板を立てました。ここは何 m ですよ、あれは大事です。それで、ここで来そうな津波の高さ以上の所に逃げることを考えておけばいいということです。

ですが、もっと危ないのは多分土砂災害の方でありまして、これはあちこちに危険箇所があります。なぜか。例えば広島の豪雨災害を考えていただきたいと思います。あのとき花崗岩という言葉が出てきましたよね。これは脆いので崩れやすいと。そこに一気に集中豪雨が来ると崩れるおそれがある。実は鳥取県も、中国山地は基本的に花崗岩質なんです。花崗岩はどういう岩石かというと、この日本列島がアジア大陸にいたころの石です。古い石なんですよね。それがこの山地を形成しているということを頭に置いていただくと、そちらの方の災害に注意しなきゃいけないのかなということはあると思います。こういうものが組み合わさりまして、それぞれの地域で何に注意をしたらいいのかということをまず把握することです。あと、実際雨が降ったとき、状況はどうなる

かとかを調べなければいけませんが、手段がない。

そこで、今、県の方が、例えば報道機関と一緒になりまして、ケーブルテレビだとかでリアルタイムで防災情報で河川の状況などを見せる、そういうシステムを入れています。もちろんインターネットを開いていただいて、県の防災のホームページから飛んでいただきますと、今、全県の河川でこういう映像だよというのが全部出てきますし、水位がこうだというのが出てきます。我々は、災害対策はそれを見ながらやっています。皆さんもリアルタイムで同じものが見られます。そういうことを活用していただく、情報のことをまず一つは考える必要があるのかなということであります。

後でまた続きは話させていただきます。

**○室﨑氏**

わかりました。重川さんの最初のお話で、四つの対策が提起されました。その一番目が自然をしっかり理解をすることでした。そこがまず原点だと。平井さんは、それを理解するだけじゃなく、しっかりみんなに伝えることが大切で、そのための情報の大切さを強調されました。これからの防災の課題の大きな柱はやっぱり情報なんですよね。情報をしっかり伝えて、それを単に伝えるだけじゃなくて、受けとめる方も正しくそれを理解するということをしないといけない。その情報をコミュニティでうまく回していかないと情報は末端まで伝わらないような感じがします。多分、平井知事さんはそこを今、一生懸命お考えになっているということだろうと思います。本当にどうもありがとうございます。

それで、もう一巡回しますね。特にここが重要だ、こういうところにもっと力を入れないといけない、といった点をご指摘ください。また今と同じ順番でいきますね。山下さん、吉田さん、重川先生、村井知事、平井知事というふうに行きますので、よろしく。最後なるべく時間をとって、平井知事には時間を差し上げます。よろしくお願いいたします。

それでは、山下さん、よろしくお願いします。

**○山下氏**

鳥取県西部地震のときの日野町ですごく感じたのは、「自分のことは自分で」という意識は自助的な意味でも大事なんだけれども、本当に支援を受けないと何ともならないような状況であっても「助けて」ということを言わない、言えない状況もあったような気がします。こういったことを考えた時に、高齢者の方とかでも、何でもやらないといけないという意味では決してないんですけれども、何らかの形で、これは地域に限らない、趣味のサークルでも何でもいいんですけれども、何らかのコミュニティへの参加実感がないと、支え支えられるということは結局機能しないんではないかということをまず一番考えています。

今日の話のテーマで、もしかしたらここが重要なポイントなのかなと、今、話をうかがいながら思ったのが、結局人口が拡大する中で機能分化してきたわけですよね、社会というものは。という中で、例えば分野でいうと防災とか福祉とかいろんなものが出てきたりとか、セクターでいっても行政とか住民とかいろんな団体とかがそれぞれに役割を担ってきたわけなんですが、今、急激に人口減少し、拡大路線が縮小していく方向になっているということは何が必要かというと、要はこれをある意味逆行と言いますか、統合していくという働きが大事なんじゃないか。言葉としては「越える」、「超える」であり、それから、先ほど室﨑さんはつなぐと言われましたが、私はもう一つ、つながるということはすごく意識をしたくて、と言いますのが、つなぐ専門の役割というよりは、つながりながらつなぐ人でないといけない。中に入っていく人が重要で、中に入りながらこれを開いたり。分野にしてもセクターにしても、個人や地域にしても、こういったことをやっていくということが重要。

ただ、そもそもこれまで違う考え方であるとか、それぞれの立ち位置でやってきた人が一緒にやる

とか越えていくというのはすごくストレスを抱えることであって。ということは、共有したり話し合ったり合意形成することが重要なわけなんですが、そこにコーディネートをしたりファシリテーションをしたり、場をならしていく役割というのが、これはそれぞれの内部でやったり、あるいは外部から関わっていくということが重要なんじゃないかなというふうに思っています。

日野町では、今年が 14 年目になるんですけども、地震から後の活動として、高齢者の訪問活動を毎月やってきています。今月が 140 何回目だったと思うんですけれども、これは元々は、先ほど室﨑さんも言われたように、災害が起こるとやっぱり高齢者がしんどいということもありますし、ケアのために始めたというのが当初の目的だったように思います。でも、せっかくだから誕生祝いで喜んでもらおうとか、それから、課題の解決とかもそうだけど、地域のいろんな団体と一緒にやろうとか、子供も一緒に取り組もうよとかそういうことをやってきています。ですから、毎月誕生プレゼントをお届けしているんですが、町内のいろんな団体に協力をしていただいて成り立っていて、そこには、例えば近くの障がい者の施設の人も一緒にやっていたり、それから、たまたま支援で出会った能登半島の輪島の方であったり、去年の広島で出会った学生であったり、いろんな人たちが参加することもあります。ですから、もしかしたら日野町で今、行っている活動は、全国で見ても稀なんではないかなというのが、災害直後であったら、よその地域の人が来て地域の活動に関わるということはもちろんあり得ますけれども、地震から 15 年たって、もう既に被災後と言っていいのかよく分かりませんが、そういう地域の活動に普段からよその人が関わって一緒に訪問している状態というのは、もしかしたら全国を見てもそんなに例がないんじゃないかなという気もしています。

これはまさに福祉をもって防災につなぐなんですが、もうちょっとだけ直接的な防災の話をすれば、普段からこうやって訪問していると、大雪があったりした時に誰が心配かというのが、ある程度勘が働くんですよね。これは平成 18 年の豪雪の時ですが、そういう情報を把握しているうちに、たまたま屋根と屋根が差し向かいで玄関前が大雪になったという家があったんですけれども、ここを訪ねていった時に除雪するつもりだったんで男 4 人で行ったんですが、誰も顔見知りじゃなかったんです。そこで、「いつも誕生プレゼントをお届けしているボランティアです」と言ったら、「いつもありがとうございます」というところから始まって、「じゃあ、雪かきをしましょうか」と言ったら「頼む」と言われたんですが、これはまさに西部地震の当初の頃になかなかうまくいかなかった、被災をした住民の困り事の把握であり、支援活動そのものなんですよね。ですから、今やっている訪問活動みたいなこういう活動が、いかに人の気持ちの垣根を低くするかといいますか、困った時にそういうことが言いやすくなったり。そういうことをずっと紡いできているんだなと思っています。

もう一点、せっかくなので、鳥取県西部地震展示交流センターのことも御紹介しておきたいと思います。今年 10 年になりますが、いろんな方々が、これは日野町長さんが来られて、ちょうど訪ねてこられた方と話をしたり、町内外あるいは県内外のいろんなところから、民生委員さんとか自治会の役員さんとか様々な方々が訪ねてこられます。それから小学校の子たちが訪ねてくることもあります。こういうふうに視察研修みたいな形もあれば、語り合いみたいなこともあれば、こういうふうに本当に小さい部屋なんですけれども、その拠点があることによってこういうことが成り立っているのかなと思っています。また、ここの主催として毎年フォーラムを行っていて、2008 年にも防災と福祉の連携をテーマにするなど、ずっと取り組んできて、どこまで進んできたかなと思うんですが、こういう拠点があり、また、こういう会をやると、マスコミの方にも来ていただいて発信もしていただける。また、フォーラムなどに

は宮城の方とかいろんな方に講師として来ていただいたり。出入りをすることによって、内と外の風通しをよくしたり、視察対応とか講師派遣でいろんな交流をすることによって、こういうふうな、日野町という小さい所での外と内の関係。それから、県域でのこういう所で外と内の関係ということが、ずっと小さい所から大きい所まで循環していくという、こういうことが大事なのかなというふうに思っています。一番最後に、今日チラシを入れさせていただいていますが、10月12日には「くろさか防災まちあるき」という企画をしますので、もしよろしければ、ぜひ御参加いただければと思います。

**○室﨑氏**

どうもありがとうございました。

続いて吉田さん、よろしくお願いいたします。

**○吉田氏**

今の山下さんのお話もそうですし、先ほどの平井知事のお話でもありましたけども、地域福祉は最大の防災だということは私も同じ結論といいますか、重要なポイントかなあというふうに思っています。すみません、先ほどのスライドをもう一度出していただけますでしょうか。先ほど見ていただいた防災福祉マップ作りという中で、本当にいろんな事に気づかれるんですね、住民さんが。この方は心配だな、災害の時にちょっと土砂災害で避難勧告が出たら助けに行ってあげないといけんなというような意見が出た人というのは、じゃあ、皆さんそういった方は、ふだんも心配だからそういうふうな意見が出るんですよねということに気づいてもらうように説明をさせてもらっています。普段からできること、見守りとかちょっとしたお手伝いということが、もしかしたらそういう災害時に心配な方には、普段もありがたいことなんじゃないかなということを気づいてもらう場なのかなというふうに考えているところです。

その後の写真をいろいろと見ていただきたいんですが、例えば、これはグループホームなんですけども、ある所でこういうマップ作りをする中で、実際新しくできたグループホームに行ったことがないと、地域の方が。同じ村の中なんですけども行ったことがないということで、じゃあ、一緒に見てみましょうということで、中を皆さんで見させてもらっているところです。なかなか実は村の中に、狭い村の中にありながら、普段のお互いの関係性ができていなかったところだったんですけども、この防災福祉マップ作りをきっかけに、こういうふうにお互いの顔を知るきっかけになったと。施設側からも、皆さんが思った以上に、集落の方が思った以上に心配してくださるということが分かって良かったということでしたし、村の方もいざとなったら逃げていいと、避難してくださいということを施設側に言っていただいたんで、本当に良かったですと。そのあたりが双方出てきて良かったなと思うんですが、これも一つ防災のことをきっかけに、普段の関係性も良くなっていったということなんかなというふうに思います。例えば、これは高齢者の方のサロン、ミニデイという活動なんですけども、その中で避難袋を持ってきて、中身をみんなでチェックしようという会議がありまして、実際に中のものを皆さんで見ておられる。これもふだんの福祉の活動の一つと一緒に防災のこともやっているという、こんな取り組みも今始まってきています。他にも、高齢者のおばあさん方が、私たちは火の消し方を知らないから、消防団の方に、若い者にホースの使い方を教えてもらおうというようなこともやった、これは野原集落という所なんですけども、本当にこれも防災のことをやりながら、高齢者がこうやって出てきて元気になる。若い方と高齢者の方と世代間交流にもつながるという活動につながってきているのかなというふうに思います。

このマップ作りをきっかけに、あくまで入り口なのかなとは思っていますけども、元々福祉的な活動とか防災、その次の一歩、避難訓練だったり、安否確認の方法だったり、そういった活動につな

がっていけばいいのかなというふうに思っております。以上です。

**○室﨑氏**

どうもありがとうございました。

それでは、重川先生、よろしくお願いします。

**○重川氏**

今、お二方のお話を聞きながら感じたのは、まさに実際に災害が起こったときには、次に向かっての暮らしの再建とか復興に通ずる活動、違いはないんですね。災害時だからということと普段の地域づくりというのは全く差がなくて、ここのところをちょっと先にお話をさせていただきたいなと思いました。まず、再建とか復興というときの役割分担表なんですが、自助と共助、どちらも二重丸が強くついています。相変わらず公助は、薄い一重丸にとどまっております。この自助と共助が再建、復興で重要な点なんですけど、まず住まい、あるいは暮らしの再建というのは、基本的には自助になります。というのも、例えば、うちの家はどうするんだ、あるいは仕事はどうするんだ、建て替えるのか直すのか、公営住宅に入るのか、いずれも非常に個人的な問題なんですね。この個人的な問題を解決するのは、まずやっぱり自分たちで方針を決めなきゃいけない。その時にはやっぱり、そうは言うものの、お金というのは重要な要素になります。地震保険に入っているのかとか、貯蓄をしていたのかなどなどです。

二つ目が、実は再建、復興のときの重要なコミュニティというのは、血縁なんですね。血のほうの縁です。家族、親戚あるいは職場や大学時代の友達といったような友達のつながり。こういう人たちを頼りにしながら、仮に例えば１カ月ぐらいちょっと間借りをしながら、次のことを考えるとか、あるいはちょっとお金を出してもらうとかいろんな力を借りています。そして、鳥取県西部地震では、住宅再建のために公的な支援がなされました。あれは非常に大歓迎されて、復興が大きく進みました。すばらしいんですけども、実はあれは、でもあれだけもらったからといって、みんな家がそっくり建て替わったわけじゃない。後押しのために大きな力になったけれども、それをばねにして基本的にはやっぱり自分で頑張ろうと思った人たちが、皆さん地域に残って建て直したということでは、やっぱり自助が基本とならざるを得ない。

ただ、その時に共助や公助も非常に役割を持っていると思います。というのも、自力で再建できない方たちが当然たくさんいらっしゃいます。私自身も震災から４年半、宮城県内の仙台あるいは名取で、住宅再建について個々の方たちのインタビューをずっと続けている中で、やっぱり年齢あるいはお金、年金しかもらっていないよとか、もともと生活保護だったよとか、あるいは精神、あるいは身体的にハンディキャップがある。それから人とのつながりですね。高齢者がなぜ復興が大変かというと、この大切な人とのつながりが薄れていく。例えば、親は死んじゃった、兄弟も亡くなった、それから大学の同窓もどんどん亡くなっていく、職場はリタイアしているから仕事仲間もいないということで、やっぱり支えてくれるつながりが少なくなるのが、やっぱり年をとってきてから。実はその時に非常に大切なのが公助です。被災地でも、こういった方たちを支える公助というのはすごく大事。例えば公営住宅を提供するとか、戸別訪問をして日常の福祉につなぐ、そういった方たちが取り残されない、立ち直っていくために支えているのが共助や公助の力になるんだと思うんです。まさにその共助と公助というのは、お二方から紹介いただいた、普段の地域づくりでそういった方達をまさに共助、そして公助が支えるということになる。

私が一番言いたい結論は、一言で言うと、やっぱり少子高齢化、ここに書いてある人口減少社会になったときには、防災ということを考えたときには、もう自助と共助が中心なんだ。そして、共助というのは放っておいてできるもんじゃなく、

共助をつくるのも自助のうちなんだ。自己責任で共助のネットワークも作っておく。そして、公助というのは非常に大切な役割ですから、その中で公の方たちがやらなければ救えない、公の方たちじゃなきゃできないところだけをお任せして、あとは自助と、自助は頑張る共助というところでやっぱり進めていかなきゃいけないのがこれからの防災、まちづくりかなというふうに考えているというのが、一番強く訴えたいところです。

**○室﨑氏**

どうもありがとうございます。

それでは、村井知事さん、よろしくお願いいたします。

**○村井氏**

それでは、地域コミュニティの防災対策で特に重要なポイントということです。二つだけ、時間の関係で御紹介したいと思います。一つは、繰り返しになりますけれども、やっぱり人の問題です。人というのは非常に重要です。特にリーダーです。宮城県の南の山元町という、津波で大きな被災を受けたところがあるんですけれども、その山元町のある集落です。そこの区長さん、我々は区長という呼び方をするんですけども、そこの区長さんが非常にリーダーシップを発揮されました。その区長さんは非常に世話好きの方で、日ごろからよくいろんな家を一軒一軒歩いて、そしてお茶を飲みながらお話をして、各家庭の家庭状況、年齢、そこの家の人の傷病、けがや病気の状況、また、かかりつけのお医者さん、かかりつけ医のことまで詳細に把握されていました。そして、災害時にはその情報を元に、避難の支援が必要な住民の避難所への誘導を図ったということであります。また、行政区内の住民の安否確認もうまく実施されました。これは非常にうまくいった例です。

とかく我々はこういったことを、今言ったように区長さんにお願いをするんですけど、今言ったような区長さんというのは正直少ないと思います、そういうコミュニティのリーダーというのは。私はそういう人ばかりでは決してないと思っておりまして、やはりリーダーとしてふさわしい人、ふさわしくない人がその組織のトップになっている場合もいろいろありますので、私は、冒頭お話ししたように、まずそういったリーダーになり得る人を県としてたくさんつくろうと、目標は 1 万人つくろうというふうに考えて、県が主催して、まずは県民向けに地域防災コースというのをつくって、丸一日研修をいたします。派遣していただくのは市町村から推薦していただいた方で、市町村の職員であったり、あるいは一民間の県民の方であったりでありますけれども、何をやるかと。災害に関するまず基本的な知識、それから自主防災組織の規則、防災計画の作成、そういうのを座学でやった後に、今度演習形式で、防災マップの作成を含む図上訓練をやって、避難所運営訓練、こういったようなことを実際やって、まず体で覚えてもらうようなことやっています。また、企業向け、事業者向けに企業防災コースというのも設けまして、災害に関する基本的知識の習得、それから事業継続計画、BCP の演習なんかも行っていると。また、当然ですけれども、半年、1 年経つと忘れてしまいますので、フォローアップの演習なども実施しているということであります。とにかくまずはそういったリーダーになり得る可能性のある人をたくさんつくっていって、そして、その方が仮に区長さんでなくても、何かあったときに、区長さんがいないとき、あるいは区長さんにそこまで能力がないときに、そういう方が区長さんの役割を果たしていただけるようにというふうなことをやっているということです。こういったようなことは、当然鳥取県でもされていると思いますけれども、ぜひ参考にしていただきたいと。決して県でなくてはできないものではなくて、市町村でも十分できることだというふうに思います。

二つ目は、何事もやはり行政頼りではいけないということです。それぞれのコミュニティごとにやれることというのもあると思います。これも一

つ、成功例として御紹介いたしますけれども、宮城県の仙台市内のある町内会なんですけれども、この町内会ではいざというときに物資の調達を、役所任せだけではすぐに物が届かないということで、災害が起きたらできる範囲の支援、協力を具体的に決めた、災害時の相互応援協定というのを町内単位で結んでおりました。しかも県内だけではなくて、県外の町内会と結んでおりました。宮城県仙台市のある町内会が、山形県尾花沢市の鶴子という地区の連合区会と提携をしていました。そのおかげで、災害が発生して、道路が通じるようになってから、すぐに米、水、野菜、果物、燃料なんかが届いたということであります。

今回の震災で一番困りましたのは、実は食べ物ではなくて、燃料でした。食べ物、飲み物は、面白いほどどこかから集まるんですね。みんな必ず家にストックしているんですよ。それをみんな持ち寄るとかなりの量になりまして、それを分け合うと何とかなるんですね。特に田舎のほうに行くと、米はもう潤沢にありますので何とかなる。しかし、燃料が手に入らなかったんですね。そういったときに、行政として燃料の確保に努めました。けれども、やはり我々が得た燃料というのは、先ほどお話のあったように、病院だとかあるいは警察だとか、そういったところに重点的に配分をしなければならない。そこで、今言ったように、ちょっと離れた他県の所と町内会単位で連携をしていて、そこから燃料等の調達もできたということで、やはり平時からそういった地域コミュニティで、内向きだけではなくて外に向けてのエネルギーというのも十分発揮をしていただいて、いざというときの備えをされるということは非常に重要ではないかと、この2つを被災地の経験として御紹介をしたいというふうに思います。

**○室﨑氏**

どうもありがとうございます。

最後になりましたけど、平井知事さん、よろしくお願いいたします。

**○平井知事**

皆様から非常に示唆に富んだお話をいただきまして、なるほどなということばかりだと思います。鳥取県も実はやはり地震を経験した県として、同じようなことはいろいろと進めてきておりますけれども、ぜひ、今日県民の皆様も全国の方々にまじりながら来ていただいていると思いますが、それぞれ持ち帰っていただいて、話し合いをしていただいて、自分のところの災害が起こり得る可能性の状況、それから自分のところの要支援者と言われるような、本当にお助けしなければいけない方々、いざというときここに逃げようとか、そうしたことを話し合って、これからまた訓練なり何なりしていただければと思います。

鳥取県もおかげさまで、自主防災組織、実はあんまり組織化ができていませんでした。地震の前はそれほど多くはなかったんですが、今8割ほど組織化も進んできまして、それぞれに工夫もそれぞれの地域でできてきていると思います。いろいろとやはり現代風に、やはり今までの経験を考えて、こういうこともやったらいいんじゃないかというのを今いろいろ手を出し始めています。例えば、教育は大事だと思うんですね、防災教育。「津波てんでんこ」のお話が先ほど村井知事からもありましたけれども、釜石の奇跡と言われたことが起こりました。実はこれと正反対のことも残念ながら起きています。子供が普段から誘い合って逃げる、そこにいたお年寄りなんかにも声をかけながら逃げる、それができる地域になることは大切だと思います。

実は今、京都大学さんだとかそうしたところとも一緒になって、日野町をまず一つの舞台としながら、防災教育のカリキュラムを作りました。こういうことのDNAを広げていかなければいけないと思います。また、先ほど申しましたように、鳥取県の場合、土砂災害の危険性ということをやはり念頭に置いていかなきゃいけない地域が数多くあります。そういう意味で、学校だとか、あるいは町内会でもいいですけれども、専門家を派遣

させていただいてそこの危険箇所を見ていただくと、こういうような事業も実は、県も主催しながら始めてきております。そういうようなことも積極的に取り入れていただいて、また見てやっていただいたらいいんじゃないかなと思います。学校の方も大分変わってきて、学校の方で我々の作った防災のカリキュラム、それを教育委員会の方でも受けとめて、教育の中に活かそうという組織的な動きに今つながってきたと思います。

また、先程から、公助というお話がございまして、これについては、例えばハード整備など、この近くでいったら法勝寺川のあの合流地点の辺りとか危険箇所もありまして、ようやく国の方も動く、我々も一緒になって動くということで、少しずつ進んできています。ただ、公助と言われることも単に 1 つの自治体の中だけでなくて、その自治体の外との、遠隔地同士の相互応援というのが大事になってきていると思います。今、村井知事もおっしゃったように、山形と宮城の自治会同士でやっている。鳥取の場合は、室﨑先生から御紹介がありましたように、徳島と相互応援協定を結びまして、これが今、いろんな領域におりてきています。例えばボランティアという観点では、社協同士の協定も結ばれる。それから町村同士、市同士の協定も結ばれる。さらに中央会といわれる中小企業の組織同士の連携も進む。それでお互いの交流も今、始まりまして、いざというとき助けに行けるようにしようと。例えば我々の県の方でも、徳島県の職員と人事交流をしているわけですね。それで、どこに助けに行ったらいいかというのは感覚がなければ分かりません。そういうものを補う。また、ヘリコプターでも常に共同の訓練をやったりして、慣熟飛行と言いますけども、そういう訓練も行ったりする。こんなようなことをしながら、今はもうそういうふうに自治体の枠を超えたお互いの助け合いということも、新しい公助の姿として大切になってきているんではないかなというふうに思います。

また、今お話がありましたような人材の育成だとかそうしたことなど、いろいろとやらなければいけないことも多いと思います。県内でも様々なところで取り組みが進んできているわけでございまして、目立った動きも出てきています。先ほど御紹介があった黒坂も、今度 10 月 12 日に町内を見回りながらというイベントをするとおっしゃっていましたが、多分、面白いと思います。例えば、私もへえっと思ったんですけども、竹竿と毛布で担架を作る、そんなようなことを考えたりして、すぐにでも自分たちでできることを工夫されたりし始めておられますし、17 の自治会がありますけど、それを束ねるような形で自主防災の委員会ができたりしていまして、多分非常に活発な地域なんだろうというふうに思います。

また、ここから近いところでも、（南部町の）東西町とかそうしたところでも、そうした自主防災の動きもしっかりしたものがありまして、例えばお年寄りの状況を把握しようと。東西町であれば見守り人というのを決められたと、そこの会長さんもおっしゃっていました。いざというときは、あの人を助ける係という人を決めておくと。それで災害が起きたときに動けるようにしておく、そんなことをされました。また、原のほうでも同じこともやっておられますけれども、面白いのは、この間も豪雨があった時に避難をされましたが、そこは工業団地がありまして工場があるんですね。その工場と協定を結んでおられて、工場の方に避難をすると、工場も協力をすると。そういう今までの発想を超えた相互協力も行われるようになってきました。また、倉吉市の丸山町の方でも、「あったか見守隊」というのを作りまして、サポートをする。

こういうようないろんな取り組みがある中で、最近特徴のある動きも出てきました。その通りだなと思うんですけども、実は勤め人はみんな米子とか鳥取とかまちなかへ出てしまいます。そうすると、村の中に残っているのはお年寄りばっかりということですね。その時に地震が起こったりするわけです。10 月 6 日の鳥取県西部地震のときも

そうでありまして、会見町（現南部町）の方がおっしゃっておられましたけれども、こういうお年寄りをどうやってこれから避難をさせたらいいのか非常に悩んだというようなお話もありました。そこで、最近はお年寄りの皆さんが立ち上がるという動きが出てきているんですね。江府町の池の内常盤会では、お年寄りの皆さんが自主防災組織を作ると。「若いもんがおらんだけえ、自分らがやるわいな」ということであります。それはそうなんですよね。鳥取市の方でも、若葉台南6丁目さんも、例えばそうしたシルバーの皆様による隊ができたり、女性の隊ができたり、いろんな形で自分たちのまちを守ろうという動きになってきています。何か固定的にものを考えるのではなくて、自分のまちに合ったやり方で、いざというときにこうしようというシステムを作っていくこと、これが大切ではないかなと思います。

県の方では市町村の方に、危機管理や防災の交付金というのをつくっていまして、例えば先ほどのような支え愛のことでも、これは支え愛の基金から、10万円ですか、わずかではありますけどもそうした支援金を出しながら組織化をするというような応援があったり、また、それぞれの町内でこういうような資材が必要だというものは、防災の交付金のほうで買えるような仕組みがあったり、実はいろいろと支援の手だてもつくってきております。それぞれの地域でぜひ動いていただければありがたいなというふうに思いますし、そうやって皆さんの中からこういうことをやるべきだということは、今度は私どものほうで受けとめて、また事業化をしていく。こうやってサイクルを回していくことで、鳥取県は、なるほど西部地震をかいくぐっただけあって防災にはしっかりとしたまちになっているな、村になっているなということになるんじゃないかと思います。

「2時46分、包帯を巻く人、2時46分、国境を越えた人、2時46分、急いで地下鉄の階段を登った人、2時46分、手を合わせる人、目をとじる人」これは和合亮一さんという、福島の被災地から詩を書き綴って発信をされている方の詩であります。3月11日2時46分のその思い、それを「生きる」という詩で表しておられます。私たちは災害と隣り合わせです。そのために、普段からコミュニティの絆を深め、どうやって自分たちを守るか、そして万が一被災したときにみんなで助け合うか、そういう基礎を普段から作っておく必要があるのだというふうに思っております。そういう意味で、今日はこのフォーラムを通じまして、それぞれの方々から大変貴重な御意見をいただけたと思います。ぜひこれを活かしていければというふうに考えております。本当にありがとうございました。

**○室﨑氏**

どうもありがとうございます。

本来ならば、会場の皆さんの御意見も聞かないといけないんですけれども、もうお気づきだと思いますけども、時間がございませんので、基本的にはこれで終了させていただきたいと思います。

残された時間で簡単に、まとめにならないんですけれども、五、六点、キーワードだけ申し上げたいと思います。一番目は、共助とコミュニティということです。まさに人口減少社会の中で一番大きな役割を果たすのは、共助のためのコミュニティをしっかり作っておかないといけないということに尽きると思うんですね。

それから、二番目のキーワードは自助と公助ということです。この関係をどう考えるのか。私は、これは生徒と先生の関係だというふうに思っています。まず生徒自身がしっかり勉強しないといけないので、それはまさに自助の世界です。でも、生徒がちゃんと勉強できるように環境をつくったり後ろから応援するのが先生というか公助の役割で、そういう意味で支え愛基金という支援が重要です。わずかというふうに謙遜されましたけれども、財政的な支援やその他の支援を行政がすることによって、地域のコミュニティが前へ進んでいけるということ、とてもこれは重要だというふう

に思っています。

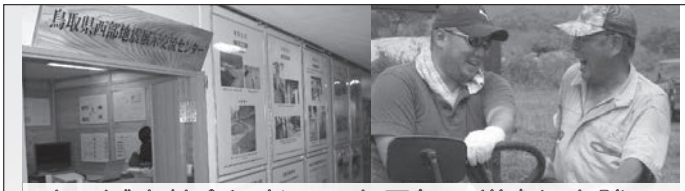
それから、三点目は教育と福祉です。教育の話を最後に平井知事さんに言っていただいて、ほっとしたんです。日常的な取り組みの中で何が鍵になるか、吉田さんが盛んに地域福祉だと、それはもうそのとおりですよね。そこに教育を加えることによって、地域の力がついていくんだと思いますので、教育と福祉というのを原点にしながら、コミュニティの活性化を図っていくことが重要です。

それから、四点目ですね。これは村井知事さんが言われたんですけど、リーダーシップとパートナーシップということです。まずリーダーシップがあって、その上で、それを踏まえてパートナーシップ、連携だとかつながりだとか応援だとかそういうものができるので、やっぱりリーダーシップとパートナーシップを地域の中でどう育んでいくのかというのはとても重要なことだろうと思います。

それから、五点目は、事前と事後ということです。これは重川さんも、他の方も言われたんですけど、結局は日常的な事前の取り組みがとても大切。事前の訓練とか鍛錬だとかいろんなものが本番でちゃんと役に立つ。事前と事後の関係性はとても大切なことです。これはまさに減災サイクルという言葉で説明されています。

それから最後です、六点目ですけど、これが今日のメーンテーマで、伝えるとか学ぶとかいうことです。経験をしっかり伝えていく、あるいは経験を学んでいく。今日は村井知事さんに来ていただいて、宮城の経験というのをいろいろお伝えいただいて、そこからしっかり学んでいくということも必要だし、それから鳥取西部地震のこの経験をずっとしっかり伝えていくという、あるいはそれを学んでいくということはとても重要で、今日のフォーラムもそういう意味で重要です。まさに鳥取県西部地震を 15 年経っても忘れないと、20 年経っても 30 年経ってもしっかり忘れずに次に活かすんだという、そういう気持ちを込めたとてもいいフォーラムができたと思います。パネリストの皆さん、とてもいい内容のある、大切なことをいろいろお教えいただきました。本当に今日はどうもありがとうございました。（拍手）

## 山下 氏



人口減少社会においても元気で災害にも強い
地域コミュニティの実現に向けて
=鳥取県西部地震15年フォーラム=

2015.10.06 日野ボランティア･ネットワーク 山下弘彦
鳥取県西部地震展示交流センター（鳥取県日野郡日野町）

**2000年10月6日、13時30分**
**「鳥取県西部地震」発生**
**マグニチュード7.3**
**日野町は震度６強**

### 日野ボランティア・ネットワーク～ひのぼらねっと～の趣旨

震災を契機に育ったボランティア精神を町に根づかせ、住みよい町づくりに生かしていこう
・・・という、自主的な組織

1)災害ボランティアセンターの活動を支援していくこと
※現在、日野町ボランティアセンター
2)ボランティアのゆるやかな絆（ネットワーク）をつくること
3)町内にボランティアの輪を広げること
4)町外のボランティアの人達とのつながりを大切にし、情報交換をしていくこと
→本質は、地域活動のネットワーク組織

### 日野ボランティア･ネットワーク（2001年4月～）

鳥取県西部地震（2000）を契機に、町内外ボランティアで結成
「鳥取県西部地震展示交流センター」受託運営（2006.10～）

●日野町内を拠点とした活動
災害復興活動→被災後の地域づくり活動
子ども～高齢者の地域交流活動（見守り）
居場所づくり活動、不登校･未就業者支援

活動記録：3冊の冊子に

●日野町内外で、西部地震・
その後の活動経験を生かす活動
被災した地域・住民支援活動（被災現場で）
支援活動や防減災の取り組み普及（平常時）
ボランティア（支援活動者）のつながりづくり

「鳥取県西部地震展示交流センター」 運営

★地域活動、災害・防減災活動の取り組み支援（講座・講演・委員会など）

### 組織の仲間が参加した災害時のボランティアに関わる活動

救援･復興ボランティア、災害ボランティアセンター運営支援、
復興地域づくり支援など（災害ボランティア活動支援プロジェクト会議派遣など）

2000/10 鳥取県西部地震/日野町
2001/ 3 芸予地震
2003/ 7 宮城県北部地震/南郷町
2004/ 7 福井豪雨/美山町
↑ボランティア
2004/10 兵庫県豊岡市水害/豊岡市・出石町、新潟県中越地震/川口町など
2006/ 1 平成18年豪雪/日野町
2006/ 7 平成18年7月豪雨/日野町･出雲市･鹿児島県北部
2007/ 3 能登半島地震/輪島市(・門前町)・穴水町
2007/ 7 中越沖地震/柏崎市(・西山町)
2008/ 6 岩手・宮城内陸地震/栗原市
2009/ 7 平成21年7月中国・九州北部豪雨災害/防府市
2009/ 8 平成21年8月台風9号災害/美作市
2011/ 3 東日本大震災/宮城県内、岩手県陸前高田市
2011/ 9 台風12号災害/三重県紀宝町
2012/ 7 九州北部豪雨/福岡県内・八女市
2012/ 8 京都南部豪雨/宇治市
2013/ 8 山口県・島根県豪雨/山口県萩市・島根県津和野町・江津市・浜田市
2014/ 8 広島県豪雨/広島市
↓ボランティア＋センター運営支援
2015/ 9 関東・東北豪雨水害/宮城県内

### 鳥取県西部地震と地域コミュニティ（日野町では）

○住宅再建・補修への公的支援：
物心両面で復興の礎に
→震災による直接的なコミュニティ崩壊防ぐ

○被災後の暮らし、減災（「減災サイクル」でいう次の災害への備え）に課題
・背景として、被災前から高齢化・人口減少によって、地域コミュニティの綻び
・ひと・コミュニティケア→次の災害への備え
・「コミュニティを機能させ支える」：日野ボランティア・ネットワーク、黒坂地区自主防災委員会等

## 地域コミュニティの防災・減災対策の現状と課題

**○高齢化と人口減少：** 担い手がいない、「お上頼り」（にさせてきた）、「つながりが大事」だが地域（における関係性）の難しさ、自分は大丈夫（正常化のバイアス）
**○「孤立化」「自分のことは自分で」：** 関係性の希薄化、「助けあう」といっても顔を合わせる機会もない、「助けて」と言えない
**○「自主防災組織」など有効な半面…：** 形骸化、マニュアルが機能しない、高齢化で高いハードル（のイメージ）
**○災害時のテーマ「元の暮らしを取り戻す」：** だが、緊急対応（命を救う）だけに偏重、狭義の防災では対応しきれず「コミュニティ」の力が必要（命を守る・支える、ひっくるめて支え合う）

## 望ましい防災対策、その取り組みの必要性

○テーマ
**災害が起こっても、**
**誰もが助かるためには、どうしたらいいか？**
**誰もが元のような暮らしを取り戻せるためには、どうしたらいいか？**

直接的に防災を意識した取り組み、減災・防災をも意識した日頃からのコミュニティ形成が共に大事（ただし、住民・地域の状況を見ながら）

＜東日本大震災の被災地でも＞
「被災による課題は生活課題の一つ」
「『仮設のままがいい』が意味するもの」

## 支え愛ネットワーク構築事業の目標（平成25年度～、現在県内6市町で実施）

地域の取り組みが活性化し、住民一人ひとりが、
地域福祉・地域防災の担い手となること
（文化・教育・防犯・・・など地域活動の担い手となる）
- ●住民による自己決定が必要
- ●住民がプレイヤーとなる

これにより、地域の見守り、防災活動などが住民によって主体的・継続的に行われ、地域の福祉力・防災力が向上すること。

※行政・関係機関は、一律の仕組みによってではなく、人や地域の状況に合わせて、これが機能するよう支える重要な役割を担う。すべて住民だけで取り組むという意味ではない。

## この事業で必要なこと

**各地域（小集落をイメージ）で住民が集まり**
**・住民が自分たちの地域の状況を認識すること**
**・地域の状況～課題やこれから（夢や希望）～について話し合うこと**
**・その中で一人ひとり何ができるか話し合うこと**

**その場を設ける支援をし、**
**住民が状況を認識し、考え、自己決定できる材料提供をしていくこと**
**またそのプロセスを支え、助けになること**

## 事業の支援構造

**地域：　取り組みの活性化**
**住民：　一人ひとりが、**
**地域福祉・地域防災の担い手となる**

↑

各市町の
行政（福祉担当・包括支援センター・防災担当）、社協が支える

地域に入れていない課題→地域の状況に応じた支援

↑

県の
行政（福祉担当・防災担当）、社協、日野ボランティア・ネットワークが支える

市町村に入れていない課題→市町村の状況に応じた支援

## 「常識的」な対策で大丈夫か？

事例（ある豪雨被災地、昨年の大型台風前の取り組み）

「一週間前、うちの町内会で集まりました。1年前、30年前の豪雨被害はどうだった？どこに逃げた？逃げるのに大丈夫だった？」その時の状況を、みんなで話し合った。

「不安な時は昼夜問わず一緒に過ごすご近所さんを決めました。それはどちらのお宅にお邪魔するのが安全なのか、一緒に集うのは何軒でどのご近所さんか、どのように安否確認をして町内会長へ報告するのか。
みんな自分のこととして、積極的に和やかに話し合いました。だから今日はかなり心強いです。」

## 望ましい防災対策、その取り組みの必要性

○自治会・市町村など地縁組織の枠組みをベースに考えながらも、地域の実情に合わせて、できるやり方で取り組む

- 老人クラブ、地域活動・ボランティア組織をいかす
- 福祉サロンなどの場をいかす
- 集落間・市町村間連携をいかす
- 集落外・市町村外の力をいかす
  （移住・定住者も含めた新たな地域、交流人口）
- ・・・
- これらを組み合わせる

## 地域コミュニティの防災対策で特に重要なポイント

**○コミュニティが機能すること**
- ●何らかのコミュニティへの参加実感：支え・支えられる実感
- ●「助けて」が言える状況づくり

**○越える/超える・つながる（つなぐ）・ひらく**
- ●分野：防災・福祉・文化・地域活動…
- ●セクター：行政・住民・諸団体や組織（社協など）・専門家・ボランティア・NPO・事業者…
- ●個々人や地域…

**○共有する・話し合う・合意形成することの重要性**
コーディネート・ファシリテーションの重要性

## ＜日野ボランティア・ネットワークの活動＞ 高齢者誕生月プレゼント企画（2002年4月～）

（「被災した中山間地の高齢者見守りとボランティア育成」）

- 70歳以上の高齢者だけで暮らす方（600人弱）を、
- 対象者の誕生月に、
- 誕生プレゼントを手づくりして訪問
  - □ お祝いし、喜んでもらう（元気付け・活性化）
  - □ 生活状況や困りごとを聞く（生活課題把握・つながり）
  - □ ボランティア活動や諸機関へのつなぎ（課題解決）
- プレゼント・誕生カードづくりに諸団体等協力（協働）
- 町内外、園児～高齢者まで活動に参加（参画・交流）
- 2002年4月～、現在も継続中
- 資金は、赤い羽根の共同募金など

月ごとに、様々な団体がプレゼントづくりで連携

## 生活支援につながる「訪問活動」

- ゆるやかなつながり～信頼感：災害時にも
  - □ ふだん訪問時：「今は大丈夫、必要なときは支援を」→平成18年豪雪：把握している地域状況・世帯状況と民生委員や近隣情報に基づきスムーズなニーズ把握と除雪活動

## 鳥取県西部地震展示交流センターの取り組み

- 被災経験の収集・伝承・発信・共有
  - □ 日野ボランティア・ネットワークが鳥取県より受託運営
  - □ 県内外から視察（自治会・民生委員・消防団…）、県内外へ出前講座、セミナー・フォーラム、アーカイブ
  - □ **学び合う場： 他被災地支援と被災地間交流**

## ●鳥取県西部地震展示交流センター／周年フォーラム

（2001年～2005年は、交流会・写真展・記録誌発行など独自に実施）

2006年 開館記念講演会「地域防災力を高めるまちづくり」

2007年「もし、再び震災が起こったら… ～中山間地における被災者支援をする側と受ける側の課題と教訓～」

2008年「防災と福祉の連携で、災害にも強い地域づくり」

2009年「被災体験を語り継ぐ ～防災の取組みへ～」

2010年 ボランティア集会「これまでの10年とこれからを語らう ～地域活動・ボランティア活動の視点から～」

2011年 緊急リレー報告「東日本大震災支援活動」

2012年「災害の経験と地域づくり ～鳥取県西部地震、東日本大震災、そして平時の取組み～」

2013年「災害をも想定し、住民主体で地域を見直す」

2014年「子どもを守る・子どもと創る～母子・子どもと地域の防災・福祉活動を考える～」

2015年「くろさか防災まちあるき」（10月12日）と、冊子「被災ママと関係者に聞く！子連れ防災」（西部地震当時、乳幼児を抱えた母へのインタビュー）

●鳥取県西部地震展示交流センター／視察対応（2014） 県内外・21団体

●鳥取県西部地震展示交流センター／講師派遣（2014） 県内外・83講座

## 吉田 氏

2015.10.6.

鳥取県西部地震15年フォーラム
～人口減少社会において地域を共に守り創る～

**智頭町の**
**「防災福祉マップ（支え愛マップ）づくり」**
**の取り組み**

吉田　圭吾

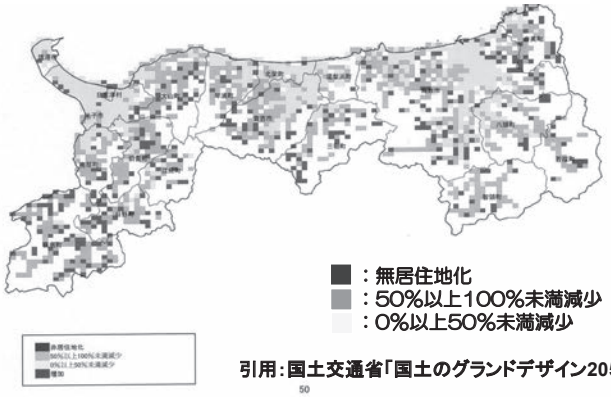
社会福祉法人智頭町社会福祉協議会
総務課　地域福祉グループ

### 智頭町の概要（ H27.4.1現在 ）

| 総人口 | 7, 613人 |
|---|---|
| 15歳未満 | 701人 |
| 15歳～64歳 | 4, 070人 |
| 65歳以上 | 2, 842人 |
| （うち75歳以上(町内の約23%を占める)） | 1, 733人 |
| 高齢化率 | 37.33% |
| 限界集落数(高齢化率が50%以上) | 6/87集落 |

| 世帯数 | 2, 755戸 |
|---|---|
| 65歳以上　高齢者のみ世帯 | 891戸 |
| （うち70歳以上　独居世帯） | 306戸 |

**【鳥取県】2050年の人口増減状況**
**（2010）年との比較**



■：無居住地化
■：50%以上100%未満減少
■：0%以上50%未満減少

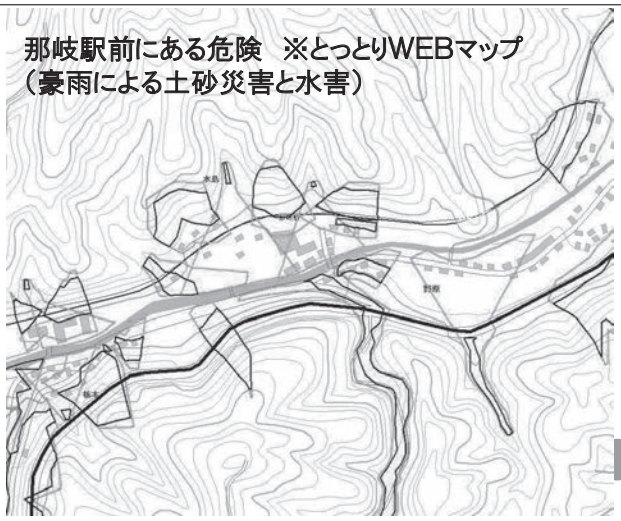
引用：国土交通省「国土のグランドデザイン2050」

50

**那岐駅前の風景**

**那岐駅前の風景**

**那岐駅前にある危険　※とっとりWEBマップ**
**（豪雨による土砂災害と水害）**



## 防災福祉マップ（支え愛マップ）とは

**■マップに反映させる基本情報**
- **町内にある住民にとって危険な箇所や不安な箇所**
- **避難場所とそこへの経路**
- **要支援者（手助けが必要な人、心配な人）と支援者**

**※ハザードマップとの違い**
**行政機関が提供しているハザードマップには大きな危険箇所は示されていますが、避難経路（誰が、どこを通ってどのように避難すればよいか）は示されていません**

※日野ボランティア・ネットワーク森本氏資料より引用

## わが町支え愛活動支援事業とは

地域にお住まいの方々が主体となって、
防災福祉マップを作成し、

①障がい者や独居の高齢者の方々等（要援護者）に対する災害時の避難支援の仕組みや
②平常時の見守り体制をつくるなど、

要援護者が身近な地域で安全安心に暮らすための取組を行う事業。

## 取組の対象は…

集落や町内会で取り組んでおられます。

■平成２４年度の実施　　２集落
■平成２５年度の実施　１０集落
■平成２６年度の実施　１１集落
■平成２７年度の実施　１０集落

８７集落中、３３集落で取り組みが開始

## 参加者は…

### 集落・町内会住民すべてが対象

役のある・ないは関係なく、集まっておられます。

■役がある方
- ・区長、世話人、役元
- ・民生児童委員
- ・地区振興協議会の集落代表
- ・消防団員　　など…

■役がない方
- ・青壮年部
- ・高齢者夫婦、1人暮らし高齢者
- ・小学生、中学生、高校生
- ・移住者　　など…

## 協力者は…

（町内）
- ■町社会福祉協議会
- ■町福祉課（地域包括、保険者含む）
- ■町総務課防災担当
- ■地区振興協議会（安全安心部会・集落支援員）

（町外）
- ■日野ボランティアネットワーク
- ■県長寿社会課
- ■県消防防災課
- ■県社会福祉協議会
- ■市町村社会福祉協議会

１１月２４日（日）　真鹿野

## 「要支援者」も、たくさん参加しています

**参加したおじいさん、おばあさんが…**

「助けに来ると危ないから、助けに来なくても恨まへん。」

「自分の家もピンクのシール貼っといて。」

「自分も高齢者だから人の世話にならんといけん時は素直に助けられるように気を付けておこうと思う。」

「自分も体が動くから助けたいと思うし、でも1人暮らしだけぇ助けられているなあとも思いました。支えられているのもありがたいです。」

「自分ら女性はサロンでしょっちゅう集まっており、井戸端会議みたいなもんだから、情報を持っていると思う。マップ作りの時も意見を出しやすかった。」

## 防災福祉マップを作って終わり！ではありません！

「避難訓練したい！」

「自主防災組織を作りたい！」と思ったら…

■町総務課　75-4111　にご相談ください。

「気になるな、心配だな…」などの相談、

「認知症について勉強したい！」という方がいたら…

■地域包括支援センター　75-6007　にご相談下さい。

「みんなの交流の場を作ろう！」と思ったら…

■町社会福祉協議会　75-2326　にご相談ください。

重川 氏

# 鳥取県西部地震
# 15年フォーラム

常葉大学環境防災研究科
重川　希志依

常葉大学富士キャンパス

環境問題
防災問題

# “防災”とは？

# 4つの対策

# 3つの目的

## 私たちが取りくむ4つの対策

### 1. 自然現象の理解

地震学、火山学、気象学など

## 御嶽山噴火災害　2014.9.27

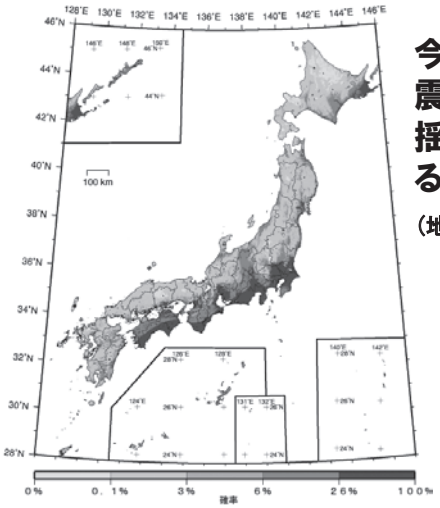
出典 twicolle.jp

出典 gigazine.net

## 長野県北部地震　2014.11.22

出典 http://www.jiji.com

出典 http://www.jiji.com




今後30年間に震度6弱以上の揺れに見舞われる確率

（地震調査研究推進本部）

7

## 私たちが取りむ4つの対策

**2. 被害の抑止**

耐震化、防潮堤、家具の固定
安全な場所に住むなど

## 私たちが取りむ4つの対策

**3. 被害の軽減**

防災訓練、防災教育、
防災マニュアル作成など

## 私たちが取りむ4つの対策

1. 自然現象の理解
2. 被害の抑止
3. 被害の軽減

事前の備え

**4. 災害対応** → → 本番の試験

## 防災の3つの対策

**1. いのちを守る**

## 防災の3つの対策

**2. いのちを守った人たちの生活をまもる**

## 防災の3つの対策

## 3. 人と地域の再建・復興

## 自助、共助、公助を考える

| | いのち | くらし | 再建・復興 |
|---|---|---|---|
| 被害の抑止 | | | |
| 被害の軽減 | | | |
| 災害対応 | | | |

## 1. いのちを守る

## 地震災害からいのちを守る

**1) 地震の揺れ**

福井地震（昭23），阪神・淡路大震災（平7）

**2) 津波**

東南海地震（昭19）,東日本大震災（平23）

**3) 火災**

関東大震災（大12）

**→東京では死者の95%が火災による死亡**

## “いのちを守る” 役割分担

| | 自助 | 共助 | 公助 |
|---|---|---|---|
| 被害の抑止 | ◎ | | |
| 被害の軽減 | ⇦ ⇦ ⇦ ⇦ | ◎ | |
| 災害対応 | | ◎ | ○ |

## 共助の力による救助

自衛隊が救出した生存者　165人
消防(神戸市)が　〃　733人
消防団(神戸市)が　〃　819人

消防・警察・自衛隊の救出は約5000名
残りはすべて市民自らの手によって救出

## 共助の力による初期消火

| | 神戸市 | 西宮市 |
|---|---|---|
| 人　口 | 145万人 | 40万人 |
| 死者数 | 3，829人 | 995人 |
| 全壊建物 | 55，000棟 | 28，000棟 |
| 出火件数 | 177件 | 41件 |
| 焼失面積 | 641，684㎡ | 7，800平米 |

**7割，29件の火災を市民が初期消火**

## いのちを守るための共助

- **いのちを守るために全員が救助活動と初期消火活動に参加**
- **自分と家族の安全が確保されている**
- **助け合いの輪は「向こう三軒両隣」**

## 2. くらしを守る

## “くらしを守る” 役割分担

| | 自助 | 共助 | 公助 |
|---|---|---|---|
| 被害の抑止 | | | |
| 被害の軽減 | ○ | ◎ | ○ |
| 災害対応 | | ◎ | |

## 組織の力，コミュニティの力

**震災関連死　500人，高齢者や弱者にしわ寄せ**

**限られた資源を公平に分け合う，弱者への思いやりの心**

**個人でできること　→　組織でなければできないこと**

## 3. 再建・復興

“再建・復興“　役割分担

| | 自助 | 共助 | 公助 |
|---|---|---|---|
| 被害の抑止 | | | |
| 被害の軽減 | ◎ | ◎ | ○ |
| 災害対応 | ◎ | ◎ | ○ |

## 住まいと暮らしの再建

### 1. 自助が基本

✧ 再建資金

✧ 家族や親戚、友達とのつながり

✧ 公助は後押し

## 住まいと暮らしの再建

### 2. 共助と公助の重要性

✧ 自力で再建できない方たち
✧ 年齢、資金、ハンディキャップ、人とのつながり
✧ 公助による支援の重要性
✧ 立ち直っていくための共助の力